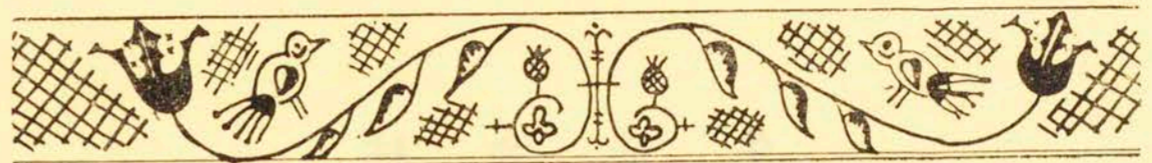


ひめまつ

須賀学園創立70周年記念号

25





ひめまつ 第二十五号 目次

表紙・扉絵……加藤春峰 題字……石川木魚 校歌・写真

〔巻頭言〕人間教育七十年……………学校長 須賀友正…一
学級文庫を作ろう(栄光の年の生徒会長として)……………青木みよ子…四

◇創立七十周年記念特集

魅力ある人間教育の場……………大塚虎之助 銅像再建のよろこび……………福田アキノ…七
よりよい学園の建設を……………渡辺 恵子・偉大な創立者の魂を体して……………小倉 初枝・桜の木に寄せて……………榎倉とし・
流れを追う……………上沢 信子・自信と誇りをもって……………木下 麗子・七十年……………金子 篤子・開かれる歴史……………細井
トシエ・思い出と歴史……………大貫 正子
◇喜びの日をうたう(短歌・俳句)……………三

あのごろ、このごろ、これから

私の学校生活四十五年……………渡辺キノエ…二四 寄宿舎費は食事つき八円……………福田アキノ…二五
生徒労働員のころ……………新井 キク…二六 夢中で歩いてきた二十年……………斎藤太嘉男…二九
バレーボールの黄金時代……………小野 孝之…三三 モンペをはいて入学式……………園部シズエ…三三
オカッパ姿の寄宿生活……………戸室 文子…三六 栄光の三冠王……………松本 照子…三六
明るく快適な新図書館……………井上 悠逸…三六 社会は決して甘くない……………金井 幸子…三六
戦災敗戦そして再建へ……………副校長 須賀 淳…三三

資料

制服のうつり変わり……………戸室 文子…四
生徒会の歴史と現況……………伊沢 雪夫…六
須賀学園七十年の歩み……………斎藤太嘉男…六
——写真・栄子先生旧銅像・旧校舎・思い出の八幡山散歩——
校旗・校章・校歌のこと……………手塚 武…四

◇学園日々の実践の中から◇

多様化の中での人間教育を(学習指導)……………大島 威二…四
誰からも信頼され役に立つ人間を(生活指導)……………手塚 武…四
明るく、素直でまじめ(職業指導)……………村岡 至…四
一人びとりの力に応じて(進学指導)……………松井 季男…四

詩

根岸 順子・小牧 里子・荒牧 幸子・茂田 富子・田村さなえ・岡田 洋子・阿部 節子・塚原 弘子・
斎藤 冷子・玉造 幸子・長島 瑞江・荒井 尚子・手塚みどり・稲葉 客子・石川ふみ江・増淵 洋子…五
篠崎 きの・篠崎 光子・稲葉千枝子・柿沼つや子・村上 幸子

◇楽しかった裏磐梯キャンプ

青木みよ子・尾田恵美子・渡辺ケエ子・野原登志子・田中 恵子・海老原美代・軽部 光子

///岬キャンプ場にて///(短歌)

手塚 武…四

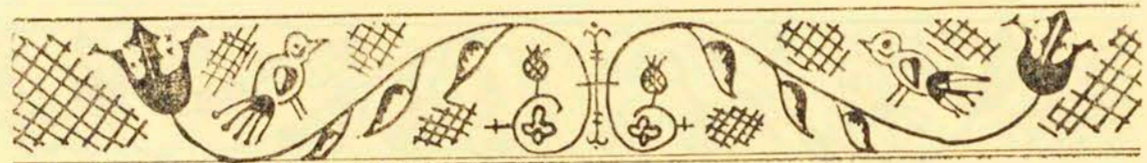
よい人間関係をつくるために(栃木県精神衛生作文優秀賞)

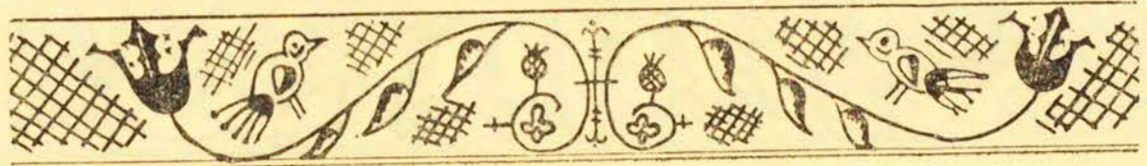
尾田恵美子…五

佳作信頼感の上にごそ……………三橋 幸子…六

対話と精神衛生……………

木下 麗子…六





▽校内読書感想文コンクール入賞作品

- 「雪 国」.....荒牧幸子 六
- 「青年の樹」.....小牧里子 六
- 「アンネの日記」.....白井洋子 六
- 「橋のない川」.....齋藤三枝子 六
- 弁論要旨「常識とは何か」(高梨杯争奪雄弁大会優勝).....近藤 都 六
- 詩・「海へ向かって」.....手塚 武 六
- 〔特別寄稿〕徹底した会釈、目礼.....引地留藏 六

税

- 喜んで納めたい税金.....田中恵子 六
- 公平な課税.....川田冷子 六
- 脱税は厳罰主義で.....石沢栄子 六
- 間接税の合理化を.....吉田美奈子 六

国税庁長官賞「税金は明日の幸わせへの通行手形」

(作文コンクール全国一位) 福田 幸子 六

アンケート

- 斎藤 寿男・田辺 幸子・富田 英也・星 敦子.....六
- 矢口 悦子・福田 和子・愛波 澄子・渡辺 裕子.....六

私の描く理想の先生

- 青木 和子・稲葉 節子・阿部 正子・上野 和子・伊沢 智子.....六
- 福田佳代子・石川 和江・古口 洋子・失 名子.....六

- 俳句.....六
- 短歌.....六

職員寄席

- 太田 茂雄・手塚 武・川俣三千木・阿部豊三郎.....六
- 伊沢 雪夫・齋藤富美子・坂入 宏子・齋藤 幸子.....六

報道番組「石の町」

本校放送部 一〇三

「特集」学園ニュース・トピック集

卒業生の残す言葉(家政科・普通科・商業科・音楽科).....一〇九

クラブ「この一年」

委員会・文化部・体育部.....一一三

▽演劇部とコーラス部が刑務所を慰問

三楽園を慰問して.....大貫孝子・中島節子 一二六

刑務所慰問

宇賀神文子 二六

「学園断想」

- 土屋 恵子・福田 幸子・片岡真紀子・権貝 啓子・小倉 初枝・石原まさ子.....一〇五
- 福田登紀子・山本 峰子・高橋 綾子・福井 順子・鈴木きよい.....一〇五

経済講話・各国経済事情につき飯塚専務のお話をきいて

.....一〇六

阿久津玲子・林 夫美子・西村 裕子・稲葉 弘子・加藤 幸子

家政科実技検定について

学校行事予定.....一〇四

卒業生就職状況

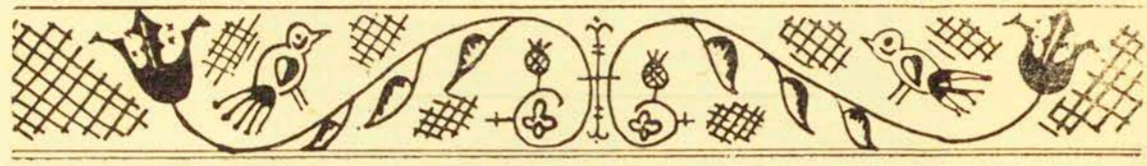
職員住所録.....一〇三

生徒会役員一覧

編集後記.....一〇四

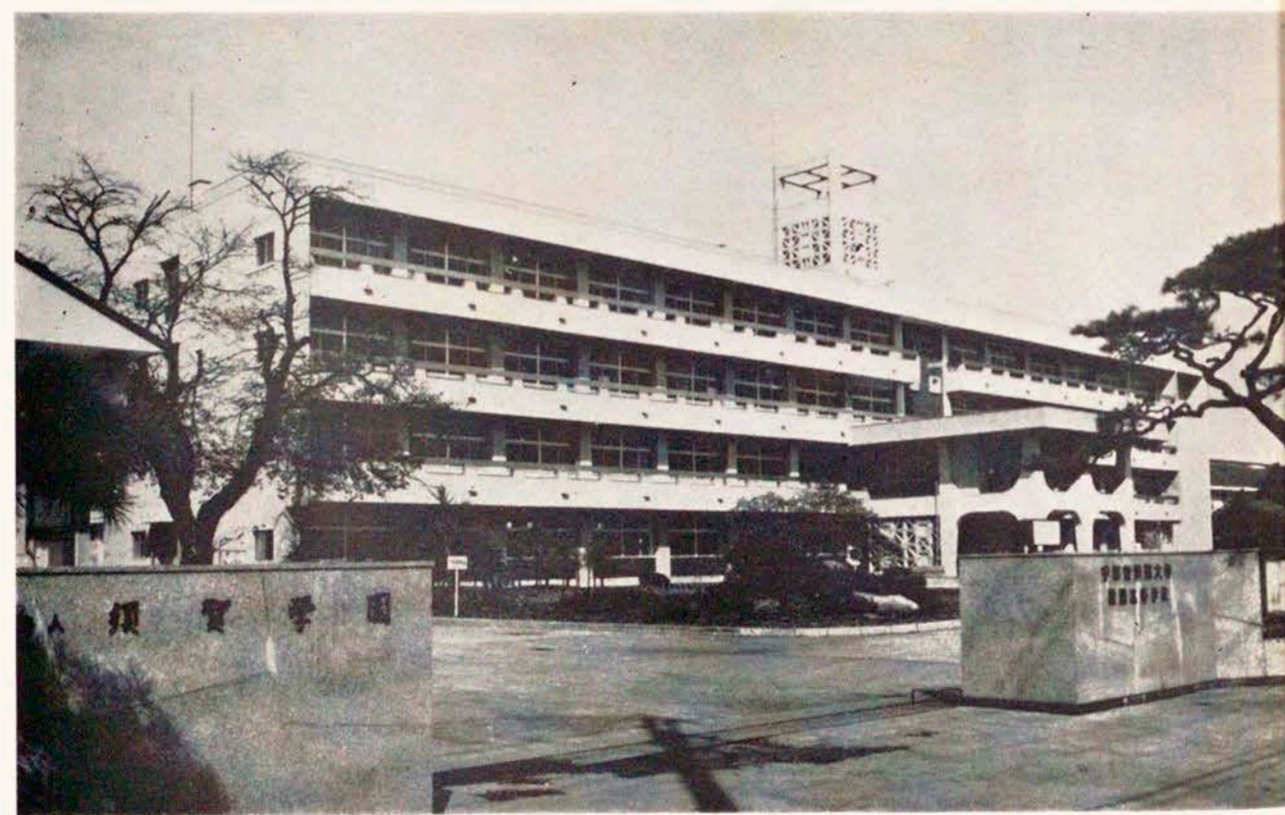
写真

伊藤礼一・川口高様



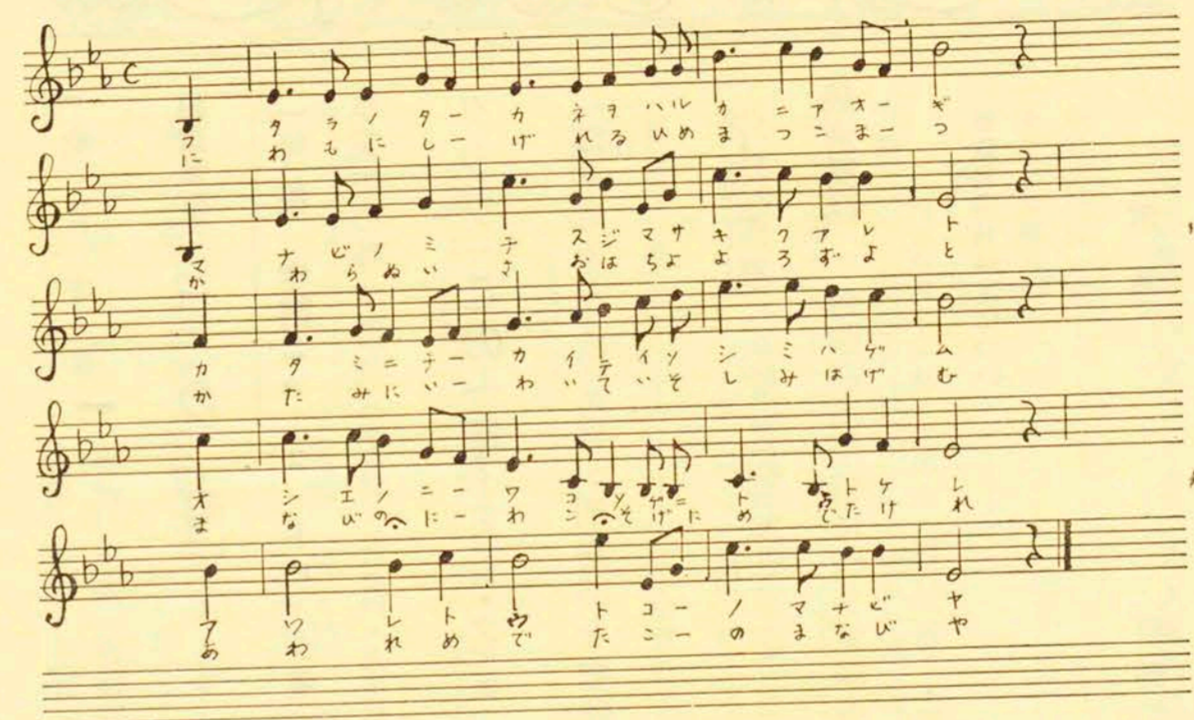


創立者栄子先生の胸像



創立70周年記念事業の一環として建設された新館の全景

校 歌



宇都宮短期大学附属高等学校校歌

一
 二荒の高嶺を 遙かに仰ぎ
 学びの道筋を まさきくあれと
 かたみに誓いて いそしみ励む
 教への庭こそ げに尊けれ
 あわれ尊 この学びや

二
 庭面に茂れる 姫松小松
 変らぬ操は 千代万代と
 かたみに祝いて いそしみ励む
 学びの庭こそ げに芽出度けれ
 あわれ芽出度 この学びや



郷土部隊の必勝を祈念して全校生徒が二荒山神社に参拝

昭和12年当時の職員・生徒（中央校長先生、向かって左渡辺甲、右寺内先生、華子先生です



第1回卒業生の記念撮影。中央若かりし日の栄子先生。卒業生の皆さんもご立派です。



学徒勤労働員一野外炊飯風景（昭和17年頃）



御命日には毎年代表が参拝します

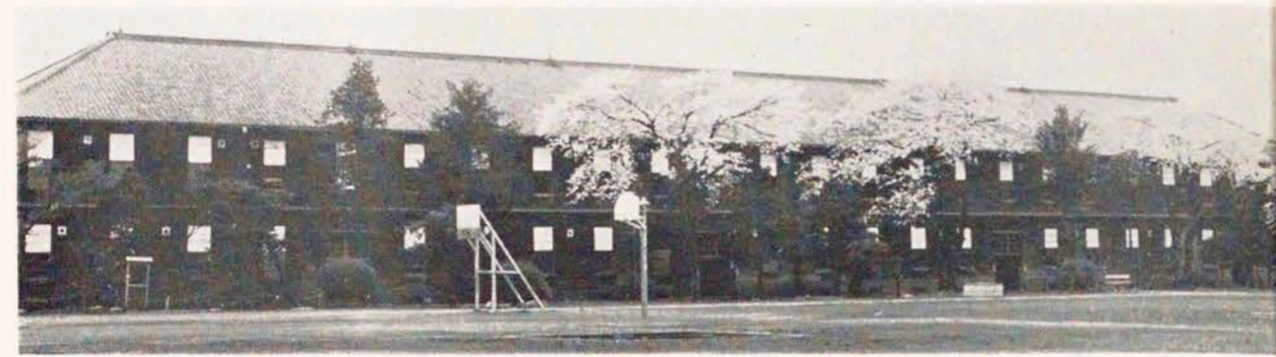
須賀子園の創立者須賀子園先生は、明治十四年四月十八日上州(群馬県)館林の赤尾藩家正親氏の子として御誕生。明治二十一年栃本県尋常中學校御卒業。東京神田の大成学校に入学。明治三十三年十一月三日先生多年の会期であった女子教育の第一人者須賀子園先生を創立して初代校長に就任。その後本校は明治三十四年其の須賀子園創立五周年の記念として本校を須賀子園高等女学校と改称されて現在にいたっている。校長も昭和十二年には尋常短期大学附屬高等女学校と改称された。昭和十四年十一月三日御逝去された。昭和二十一年須賀子園高等女学校の創立六十周年の佳辰にあり卒業生一万八千名余るを招き、ここに須賀子園創立五十年の歴史と経緯を記し、御命日にあわせて御忌辰を永遠に伝へたものである。

昭和十四年十一月三日
須賀子園高等女学校一同

本校70年の足跡がきざまれている碑文

日光市の吉新きく子さんへ宛てた栄子先生の直筆

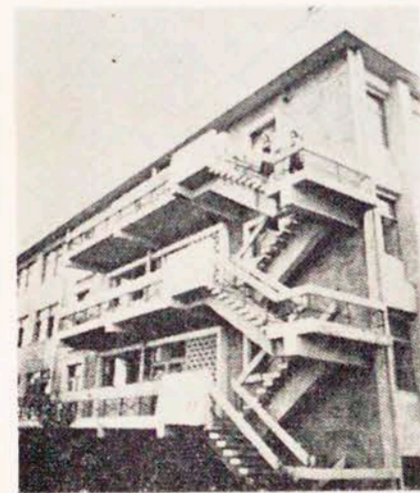
＝ 校 舎 あ の こ ろ こ の ご ろ ＝



桜花爛漫ノ昭和21年4月……移転直後の本館（改造前）



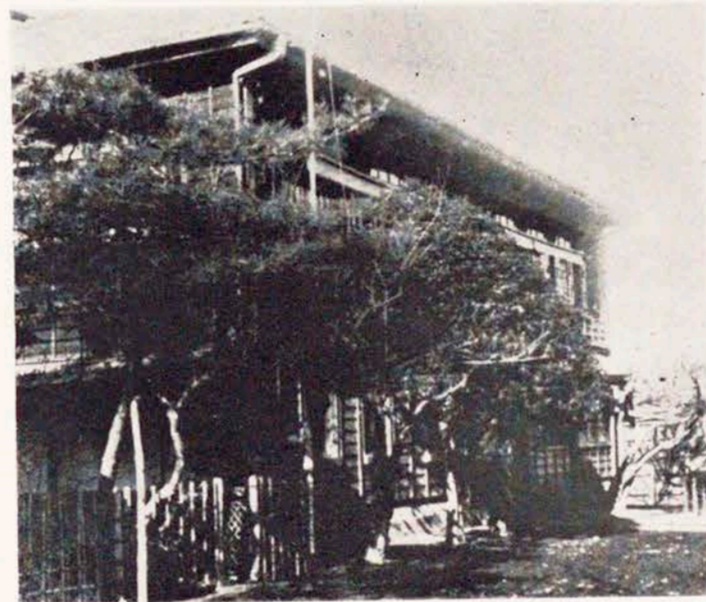
昭和43年度の本館全景



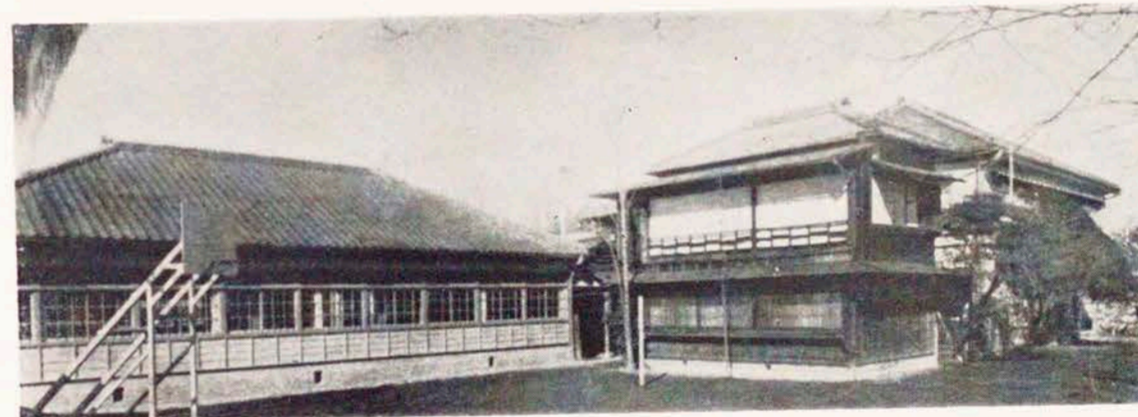
近代的施設、設備を誇る商業科校舎（昭和39年4月）



芸術的な雰囲気のためよう音楽科校舎（昭和40年1月）



ひめまつ緑もあざやかに……創立のころ

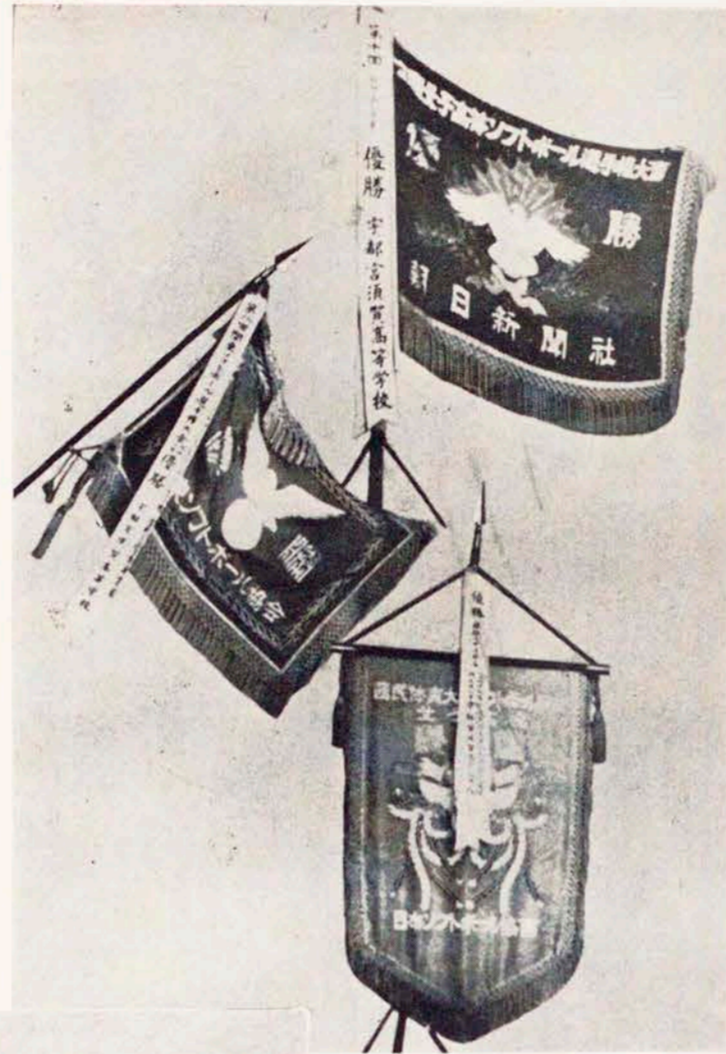


講堂も完成（向かって左）し設備もととのって！



須賀高等女学校時代の校舎全景……水清き百間堀のほとり

ソフトボール部が見事、三冠
 王を獲得、昭和33年
 全日本女子高校ソフトボール大
 会優勝 8月9日(上)
 国民体育大会ソフトボール優勝
 10月25日(下)
 関東ソフトボール選手権大会優
 勝 11月10日(中)



発足当時のソフトボール部
 (後列中央右は副校長先生)



昭和45年度関東大会優勝の一瞬……ソフトボール部



生徒会総会……活発な質疑応答、きき入る表情にも真剣味が……



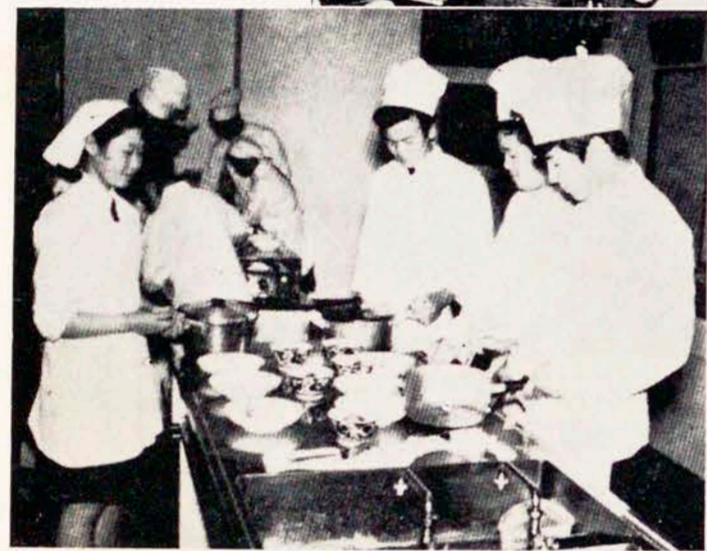
ひめまつり創刊号(中央) 創立50周年記念号(左)
 同60周年記念号(右)



創立60周年記念音楽会(於栃木会館)



手芸



被服製作

調理実習



商業実践



タイプ室での勉強

一人一芸、特技を身につけましょう

やさしい心づかいの運動



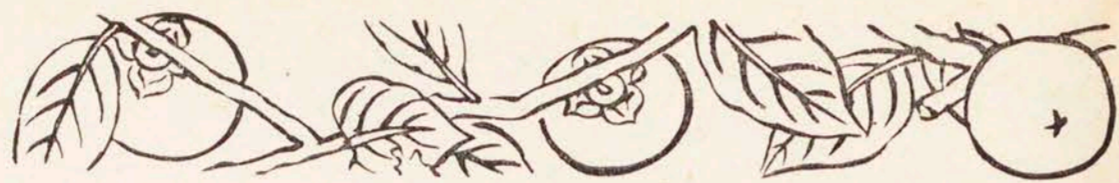
今年も敬老の日にプレゼントしました。



コーラス部 若草学園を慰問しました。

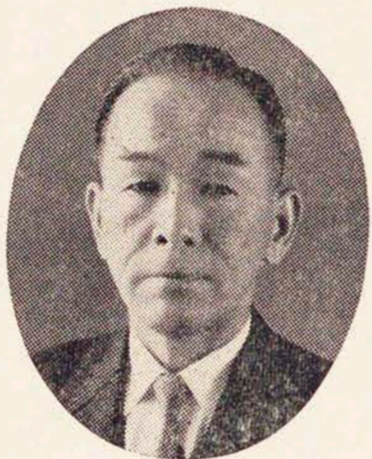


演劇部の宇都宮刑務所慰問



●●●●● 卷頭言 ●●●●●
人間教育七十年

学校長 須賀友正



例年ならば、冬の日ざしのあたたかい庭を眺めながら、「ひめまつ」巻頭言を書くのが私の年中行事のひとつになっていたのだが、ことは、秋もはじめという季節に原稿の依頼をうけることになった。

それというのも、いよいよ本校の創立七十周年記念の式典が来たる十一月三日を中心にとり行なわれるので、ことしの「ひめまつ」も、七十周年記念特集号として、この佳日をトして発行したいという編集部からの希望があったからである。

時あたかも、人類の進歩と調和をうたったまぼろしの祭典「日本万博」のフィナーレのあとをうけて、奇しくも一九七〇年という秋に、本校の七十周年記念祭を行なうというとり合わせにも、なにかの縁（えにし）が感じられるし、若いつもりでも暦年齢の上では、私もことは数え年で七十歳になることもこれまた、何にかのえにしではなからうかと思ったりしている。

すべてが、ひと区切りをつけて、大きい未来に力強い一歩をふみ出そうとしている秋と観ずるとき、私の胸には勃然と新しいファイトが湧き起こってきて、青年のように「まだ



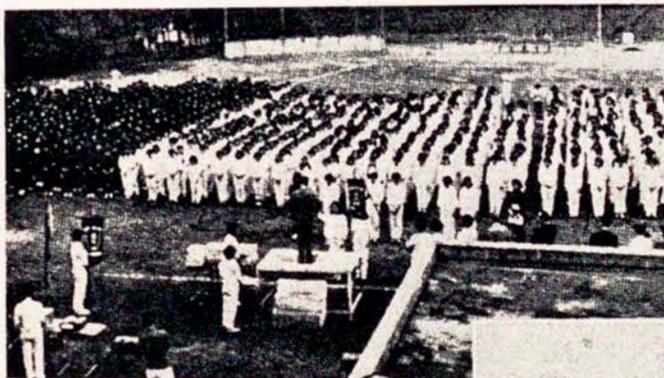
磐梯山を
母なる神と
仰ぎつつ
岬キャンプの
朝
楽しかり

武

校旗はためく下に……裏磐梯キャンプ訓練、200の隊員たちの指導に当たったつわもの達の顔ぶれ。



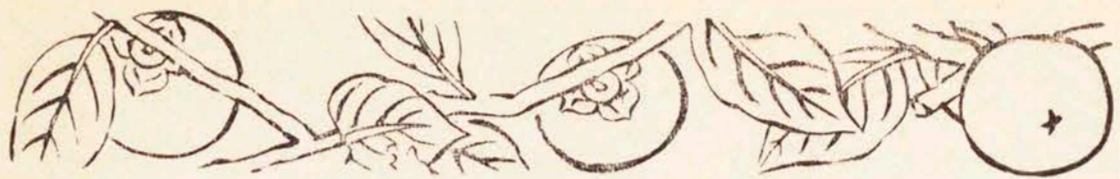
磐梯山の頂上をきわめました。



校内球技大会…戦い終って表彰式



選手も応援団も……熱狂する奮戦ぶり



まだこれからだ、やるぞ、やったるぞ！」と、ちょうどマッターホルンを望む山男のような気概の躍動するものをおぼえるのである。

「老人は過去を語り、青年は未来を語る。」ということばがある。私はまだこの「老人」と呼ばれる人の仲間入りはしたくないと思っている。私が過去を語るのには、よりよい未来をきずくために必要な知恵としての経験を語るのであり、新しい世界の創造のために、いささかなりとも寄与したいという願いにもとづくものに外ならない。

思えば明治、大正、昭和と三代にわたる激動の世紀を生き抜いて七十年、その間創立者の栄子先生が三十四年、私が引継いで経営に当たるようになってからちょうど三十六年、合わせて七十年になるのだが、共通していることは、「学校こそ私の生甲斐」ということである。ことばをかえていえば、前校長も私もともに自分の生涯のすべてを学校に賭してきたということである。

つまりは、ひとすじに入づくりに——人間教育に専念してきた、ということになる。二代にわたって一万八千有余名の有為な卒業生を社会におくり出し、その卒業生の一人ひとりが本校の生活目標である「一人は一校を代表する」のモットーを体して、家庭に、社会に、学園に、はば広い領域に活躍してくれていること、そしてそれぞれの立場で、社会のため、お国のために役立つ人——社会的価値をもたらす人としてりっぱに働いていくこと、このことが私にとっては最高、最大の喜びなのである。

創立以来本校は、しつけの厳しい学校としてひびいている。「礼法を正す」「己れにきびしく他人には寛大に」、この二つの柱を生活の軸とし、同時に一人ひとりの生徒の個性、能力、適性、希望、体力、興味等をよく観察して、長所を伸ばし短所は矯めてゆく。さらには、社会に出て、あるいは家庭に入ってすぐ役立つ技術、技能を習熟させる。このような



心構えで、ひとりびとりの先生が毎日の授業を、キメ細かに実施し、積み重ねてゆく。その集積の中で、だれからも信頼され、愛される全人間が形成されてゆくようにと期待する。これが本校教育の基本方針であり、私としては、三十六年間この方針を体して進んできた。「おねがいましたます」「ありがとうございます」「ごめんなさい」この三つのことばが誠実をもって自然に使われるようになったら、もうりっぱに一人前ということができる。

「正直」とか、親切とか、友情とかそんな普通の道徳を堅固に守る人こそ、真の偉大な人間というべきである。」とはフランスの作家アナトール・フランソワのことばだが、この何気ないことばのなかに、望ましい人としての在り方が示唆されているとつねに私は思う。

そして、戦前、戦後を通じて、とくに教育思想の大混乱をきたした終戦直後をもふくめて終始変わるところなく「全人間教育」という基本方針をつらぬいてきたことを、私はひそかに誇りともするものである。

時は推移する。人も推移する。喜びも、悲しみも、所詮はこの流れのなかの、流転のなかでの証（あかし）に過ぎないであらう。

一個の人間としても、一本の草木、一本の花と何等異なるところないものである。私がおもしく長く生きられるものとしたら、この学校とともに、一万八千有余名の卒業生の皆さんのなかに、また更に後につゞく皆さんの中に生きることにあるのであらう。

こう考えるとき、私にはまだまだ為すべき使命がある。渾身の力をふりしぼって、未来をきずく一礎石たらんとする奮勃たる勇気の新たるものを感じるのである。

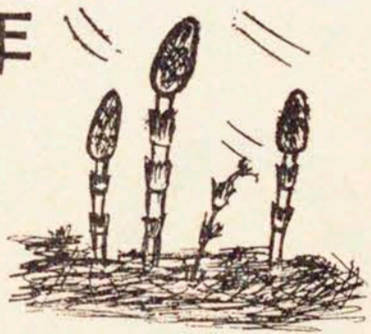
創立七十年、皆さんありがとうございます。私どもの今日あるはひとえに皆さんのお力ぞえのたまものであります。どうぞこれからも末長く本校の発展のためにご協力くださいますようお願いいたします。

あのころ

このごろ

これから

私の学校生活四十五年



渡辺 キノエ

(明治三十五年入学)

本稿は先生が本校創立六十周年に当たってのものした手記の一部を特にお願いで収録したものである。

編集部

四十五年よくぞ歩みし道なりしありがたきかな伸の恵みは

もし昔の人のいう「人生五十年」ということばで考えた場合、私は四十五年という長い期間を本校で働かせてもらったおかげで、人生五十年、半世紀にもおよぶ教員生活を送れたことになり、これひとえに両校長先生をほ

じめ多くの方々の暖かい心情のたまものと、ただただ感謝の気持ちでいっぱいです。そして現役の教師として、創立六十周年の記念祝典に参列することができたばかりでなく、表彰の栄誉をも拜する事ができましたことは、ほんとうに二重、三重の喜びと申し上げる外ございません。

明治に生まれ、大正、昭和と三代にわたって発展してきた本校の盛大な祝典に参列した私は、演壇に立つ校長先生の姿の中に創立者故柴子先生の面影がほうふつするのを感じ、ただもう泣けて泣けて仕方がありませんでし

た。それは今日のこの盛大な儀式に対する感激と同時に、十七年前に亡くなられた先生の在りし日のお姿のなかに、私自身の青春の日々の思い出のよみがえるものをおぼえ、いずれも返らぬものに対する追慕の思いに胸をときざされたせいでもあったのでしょう。

古い方はご存知のように、私は本校の卒業生で、創立二年目、柴子先生がまだ二十八才のころから教えをうけた者です。共和裁縫女学校と改称されたばかりでした。

柴子先生は当時並び無き英才とうたわれ、気品高く、すぐれた識見をもち、ほんとうに若々しく立派でした。

私の在学中の生徒数は三十名程度で、そのうち七名が寄宿生だったと思います。私も寄宿におりましたし、一番年少者でもあり、それに母が亡くなってしまいましたので、休暇中でも帰省せずにいつも校長先生とご一緒して学校で過ごしたものです。こんな私を先生は我子のように(あるいは妹のように)であつたらうか)母代わりに面倒をみてくださいました。お作法はとくにやかましく、正しききびしいつけ、お掃除の仕方、食事のつくり方、服装容儀にいたるまで、それこそ一から十まで仕込んでくださいました。もちろん本

命である学問、技芸の指導はいたれり尽くせり、で勉強、しつけ両面にわたってきた、えられたいという言葉がいはんよくあてはまるのではないかと思います。

卒業後、私は二年ほど助手として学校に残り、その後家庭に入りましたが、種々の事情から大正七年よりふたたび母校に勤める身となり舎監を兼任することになりました。そのころは学校はすでに河原町にあり、名声も大いにあがって



寄宿生は百名をこえ、校舎も第一、第二校舎にさらに第三校舎を増築校旗も制定

され、一人ひとりの適性や能力に応じて実力をつけさせ、健全な家庭婦人を育成するという、当時の校風良妻賢母主義にもとづく教育方針が、ようやく世の識者の認めるところとなり、校運はますます隆昌に向かうこととなったのです。

大正十二年ごろには第四、第五校舎も建ちつづいて校名も宇都宮須賀女学校と改称し、昭和に入ってから早稲下で初めてのバザールを開

催しました。これが年中行事となり、「須賀さんのバザール」と宣伝され、宇都宮の名物とまでうたわれるようになりました。

女手ひとりで経営と教育をとりしきっていられた先生のご苦労はひとどおりではありませんでしたが、ようやく明るい曙光の見え出した昭和九年秋拝謁の栄誉を前にして逝去されたことはほんとうに心残りではありません。けれども後をうけ継がれた現校長先生の優秀な頭脳とご手腕により、戦時下、戦後の困難な時代の荒波をのりこえて、創立五十周年さらには六十周年記念の式典をかくも華々しく催されましたことは、私どもの生涯忘れられない喜びであります。その上私は四十五年

勤続者として晴れの表彰をもうけるという光榮に浴することもできましたこと、まことに感謝のほかにありません。

私の人生にとっては学校が全てでした。本校こそ私の命のすべて、全生命をかけた心のふるさと――青春の泉なのでございます。

退職――思っただけでも悲しく、胸がせまり、涙がこみ上げてきてなりませんでした。

母校よ、永遠に!

校長先生、先生方、全卒業生の皆さんよ、どうぞおしあわせにと母校のご発展をいりつつける私です。(元本校教諭。本校第三回卒業生。八十四才。宇都宮市一の沢町在住)

寄宿舎費は食事つき八円

はかまに白たびで陛下のお出迎え――

同窓会長 福田 アキノ

(旧姓半田・明治四十五年入学)

本校の創立七十周年、ほんとうにおめでとうございます。私は大正三年に卒業しました。入学したのは明治四十五年四月ですが、その年の八月に明治天皇陛下がおかくれになりま

したので、同月から大正元年となりました。一年生の四月から七月までは自宅から学校へ通いましたが、第二学期からは仲のよいお友達の前井マズさん(今は亡き友)と学校の

寄宿舎に入りました。当時の校名は共和裁縫女学校で、授業料は月六十銭、寄宿舎費は食費ともで八円でした。したがって、父母から毎月十円送金していたら、お小遣いまで含めて十分でした。

本校はその頃、河原町の現在の校長先生の御自宅のあるあたり一帯にありまして、宇都宮城跡のお堀が校門の前にひろがり、そこにはたくさんのお鯉が泳いでいました。校舎の二階から見おろしますとほんとうによい眺めでした。私のクラスには福島県から二人、茨城県から一人お友達がいきました。当時は県立学校は県内に一、二校しかありませんでしたから、全県下から本校に生徒が集まり、また遠く県外からも多勢の生徒がきておりました。学校の授業科目はお裁縫が主でしたが、そのほか、家政(衣・食・住)、習字、作文、手芸、お作法、生花などがありました。当時は修学旅行や遠足などはありませんでしたが大正天皇陛下が日光の田母沢御用邸においでの際には、宇都宮駅までお出迎えやお見送りに、栄子校長先生がお先に立ち、生徒一同がまいりました。そのときは、はかまも折り目正しく、たびも真白のきれいなものを着ておきました。

栄子校長先生は、良妻賢母主義の女子教育を進め、栃木県の女子教育の草分けとして、大

正天皇陛下からごほうびをいただきました。それはちょうど私達の在学中のことで、生徒たちは心からお祝い申し上げたことでした。卒業生は、先生方が前列に、卒業生はそのうしろに階段のように立ち並び、全員一緒にとりました。現在は卒業生の数も多いのでこのようにはまじりません。制服のはかまのうえにバンドをしめるようになったのは、私達より一年あとの大正四年からのようです。

本校の卒業生は、きれいずきでお裁縫も上手で、どこへお嫁にいらしてもほめ者でした。これは現在の卒業生でも同じことでしょう。さて、私達が卒業してから二十年が過ぎ、昭和九年十月十四日、栄子先生がおなくなりになりましたという報せに接し、驚き悲しみ直ちにお友達と一緒に会葬いたしました。先生

学徒労務動員のころ

校舎全焼！ 苦しかった間借授業

新井キク

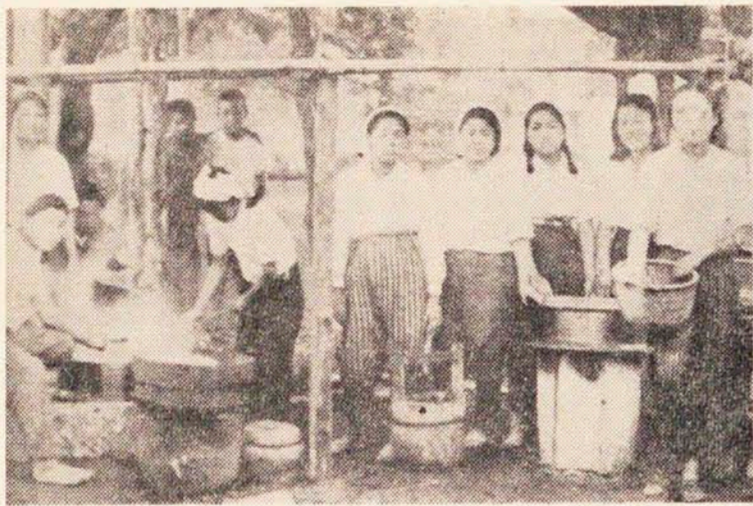
満州事変、感溝橋事件、太平洋戦争へ進展し、青年男子は戦に召され、本校でもお二人の体操の先生がご出陣。その欠員のころ

へ私が採用されたのは昭和十四年桜咲く頃であつた。小学校六年を終了して入学して来る四カ年

課程の一部生。この担任となり、変わりばえなく、お気の毒だったが卒業まで持上りだった。そのためか今では親子のような気がしてならない。

◆労務動員の農作業◆

この一部生が四年生になった頃、大東曲戦争が始まり、学徒動員と云う言葉が生れ、修学旅行も遠足も運動会も、みんなお返し、教科書やペンを離れて農事の手伝、やけつくよ



少しでもおいしいものを……と懸命な野外炊事風景

うな炎天下の麦刈、本校生は雀宮小学校へ一週間の泊り込み、毎日麦刈作業。炊事当番の生徒は、夜明けと共に起床。折から朝の静けさを破って上り列車がゴトッと走る。「リョちゃん」と呼ぶと「ハイ」と跳び起きてくれた生徒、今は川治のお宅でよいお母さん、よい姉さんとの噂を耳にしている。炊事当番の生徒は鍋炭でまっくらけ。一釜に多量の飯炊きで、その苦勞は大変なものだった。おこげが出来た時は、小さなおこぎりを作り、醤油をつけてみんなに食べてもらった。

私は平石北小へ同様宿泊で稲刈。然し陽気よく、赤とんぼすいすい。涼しい風に吹かれて砂めの田圃、鎌の切れ味も湧えて上々だった。

◆当時流行の夜行軍◆

一週間宿泊の稲刈が終わって学校へ引揚げ。その頃この学校でも夜通しの行軍が流行し、本校でも実施。夜八時月を仰ぎ校門出発。築瀬から上三川街道を下すれば、ごろ／＼の石ころ道。つまずくものあり、転ぶ生徒あり、雀宮東谷小で一休み。右折して安塚経由、西川田小あたりは眠いことこの上なし朝の二時頃だったか、校庭を借用、少休止した時は、話ささえずなく、みんな仮眠に入っていた。出発合図の笛を吹いても動かない生徒

達。「おきざりするぞ」等と大声の男子先生。やつと隊伍を組んで歩き出しても道のどまん中に馬糞の山。これにつまずき、ぐず／＼していると自分の列はどの辺か、お友達を探するのに困難。何しろ暗い夜道だった。鶴田を過ぎ宇高付近でご来光を拝み、先頭の鼓笛隊が演奏する笛の音にやつと吾に返ったものだった。この行軍に参加された卒業生の皆さん達あのファイトできっと立派な奥さんになっていることと想う。

◆学徒動員昭和十八年に◆

戦争が次第に大きくなり、上級生は軍需工場へ動員されることになった。専攻科生は清原飛行場へ、本科の上級生は中島工場へ、工場門の出入は隊伍を組んで「歩調とれ 頭右」の号令のもと、これが上手に出来るかどうかは学校の名誉にかゝるのでうんと踏張って通過した。

工場内に蝉しぐれ、と云うと、風情ある表現かも知れないが、蝉が百万匹も鳴き続けるような機械の騒音、その中で馴れない手つきで、ハンマー使用の飛行機部品の打鑄、下手に出来れば職工さんに怒られて、泣き泣き作業をしている生徒を見受け、なだめたり励ましたり、工場派遣職員の仕事の一つであつた。

ソレ警戒警報とあらば、受持工場内の生徒を所定の避難所へ逃げさせ、隅々まで巡視、全員待避を確認の上、自分も逃げ出す。避難所は遠い林の中、やっと生徒の所へ駆けつけるころは、敵機上空飛来、無気味な空襲警報が胸を刺す心地、これが雪解け道の時もあり、今当時に思いをいたす時、一人の生徒の怪我もなくよく生き抜いたと自分を驚いている。下級生は毎日学校の防空壕掘り。お嬢様がスコップを持ったようだが沢山の壕を掘りあげた昔懐かしい須賀さん前の百間堀(宇都宮城外堀)は女性徒の手で埋立てられ今は立派な住宅街と化している。

◇城山村の林の開墾作業◇

短大のある鹿沼街道を越した北の丘陵、この林の根っこ抜き、十人もかゝって一株抜ければ鬼の首でも取った喜び、増産の国の方針により、さつま芋を植付けたが、肥料なしでは流石のおさつまも、指程しか育たなかった。それでも食糧不足の折柄喜んで分けていただいた。

◇宇都宮空襲と学校◇

どんなにつらくても勝つまでは、と、互に励まし頑張り続けた職員生徒であったが、その甲斐もなく、昭和二十年無惨空襲によって

河原町校舎は校長先生ご自宅諸共、全部灰となってしまった。

全校舎を、家財道具のすべてを、焼失された校長先生。学籍簿は完全にまもられた。保管庫の入口に置一枚を撤出され蓋をされた。直撃弾はこの畳を突き抜いて落下したが、中に水溜りあり、幸い難をのがれ、現に校長室に保管されている。

◇終戦―苦しかった間借授業◇

全校舎を焼失した本校は、工業校、実践校、第一高女と間借りで授業を始めた。宇都宮の体育館で卒業式を挙げたこともあった。先生も、生徒も、せつない思いの連日であったが致し方ないことであった。

◇現在の地へ引越し落付く◇

四十部隊跡の現在の地へ落付いたのは、終戦の翌年昭和二十一年のこと。校舎となるかつての兵舎には南京虫、やせ虫がわんざといふて弁当は校の下で。花一ひら二ひら弁当箱に落ち、私達を祝福するかのよう。

◇ソフトボール三冠王を実現◇

平和が廻り、スポーツ熱勃興、戦後の景物ソフトボール競技の誕生。いちばやくとり入

れ研究された草分け、土岐監督の下、昭和二十六年国体初陣ながら第二位。四国坂出市で強豪安田学園を破り全国優勝。あの嬉しさ、投手よし、打棒よし、守備完璧、然しこの栄誉は、日頃の「練習に涙あり」であった。

昭和三十三年大阪西宮での全国大会、富山県での国体、群馬県での関東大会と、みんな優勝、三冠王の夢実現、校長先生、大塚会長さん、横山監督以下選手涙を流して喜んだのであった。若しその時の選手の方々に再会出来たら、どんなに嬉しいことか。現在のバックネットはその時の記念に設けられたものと思ふ。

以来伝統を継がれるソフトボール部の皆さん、先輩の残された業績を遺憾なく發揮されますよう。

◇品のよい在校生と胸像再建◇

先頃学校のお手伝をして感じたことは生徒の皆さんが上品になり好感をもてるようになったこと。それは喜ぶべきことであるが、一輸入れれば、昔の生徒より、体力が劣ったように思われてならなかった。以前は保健室使用の生徒などほとんど稀だった。歩くことの少くなった現今の世相が、若い生徒を弱虫にすることを遺憾に思った。

間借り教室で勉強した先輩に比して、仰ぎ見る立派な校舎で授業を受けられる幸福をよく考え、生活目標である「一人は一人を代表する」を念頭におき、立派な生徒となり、将来よき妻よき母となれるよう祈る。創立者栄子先生の胸像は、久しい間の念願であったが同窓生の手によって建立され、お念式典には除幕されて玄関前に凛然としたお

顔を拜すことが出来、生徒達へ無言の教訓を与えて下さることご同慶に堪えない。私が奉職した当時は生徒約五〇〇〇名職員十五・六名のこじんまりした学校であったが大木の繁りに似ての大発展PTA各位の木校に寄せられた好意に感謝し、心からの拍手を捧げる。(元本校教諭)

夢中で歩いてきた二十年

|| わたしにも青春はあった ||

斎藤 太嘉男

遠くでピアノの音がかすかにきこえる。二部合唱の女性コーラスもきこえて来る。どこからか明るい笑い声もきこえて来るようだ。こんな生活がすっかり身について何時のまにか二十年余たってしまった。

私が就任したのは昭和二十二年八月末、まだ夏の名残が残っている頃だった。教壇に立っての第一声は全然覚えていない。多分月なみに「これから仲良く勉強して行きましよ

う」というようなことを言ったにちがいないが、何しろ生まれてはじめて二十四の歳ならぬ八十の歳、それももう若き乙女達にじっと見つめられていたんでは何を言ったか、どんな授業を展開したか、まるっきり覚えていない。

それが今は、デカイツラをして「君達は：「なんて言っているのだから二十年という年月は大いしたものだ。ところが本校の歴史

は七十年というのだからこれまた大変なことである。先きのことは遠くにかすんでしまっただうなっているものやら皆目見当もつかない、まさに神秘的な存在だ。私が知っているのはその場にも満たないのだから無理もないことだが、その私が七十年の歴史のことをうんぬんすることはまことにお恥ずかしい話したが、ただ夢中で歩いて来た二十年のことを思いつくまゝ書いて見たいと思ふ。

当時の本校は校名を須賀高等女学校と書いていた。生徒数六〇〇、職員の数二〇名と記憶している。

校長室は今の旧保健室を二つに仕切って、事務室と背中合せになっていた。職員室は今の職員更衣室だった。私の席はたしか窓際だった。若い男子の先生方は私を含めて六名、こじんまりした世帯であった。

当時は一部生と二部生の二種類の生徒が居た。一部生とは小学校六年を終了して入って来るもの、二部生とは高等小学校(当時は小学校六年の上)に高等小学校二年間があった)を終えて入学して来るものである。

制服も今の制服の前の型(現在の制服は昭和三十七年度入学生から制定されている)で白い襟カパー清潔なセーラー服の清楚なスタ

イルであった。ただその布地は戦後のことで上等のものではなくお粗末なもので、スカートなんか全然見られないモンベスタイルであった。(モンベって知っているかな?)

ミニスカートを見られた今の生徒からは考えられないスタイルであった。それだけ当時の生徒は大なり小なり戦争の悲惨な生活を身をもって体験していた。だから戦争のない平和な学校生活が楽しかったわけである。

教室の中では笑顔一つ見せなかった。何時も暗く淋しげな目をした成績抜群の子、その子がバレーボールに興じて居たある時、思いもかけず、キラ／＼と輝いた目をしていて、ことを今だに忘れられない。戦争の傷あとがあとかたもなくなくなった昭和元祿の今から見ると夢のような話だと笑われそうである。

そんな頃、教育界には大きなことが持ち上った。学制改革である。旧制の中学校、高等学校の廃止である。新制中学、新制高校の発足である。宇都宮短期大学附属高等学校の前身、宇都宮須賀高等学校の誕生であった。

ただ残念ながら新制中学校の寿命は短かった。中高一貫教育に踏み切ったから中学校最後の卒業生を送り出したのが昭和二十九年三月だからわずか七年間ということになる。

集まる場所がなかったのである。

そこでこの建物が登場する。二階の三教室をぬいてそこを集合場として使ったのだ。

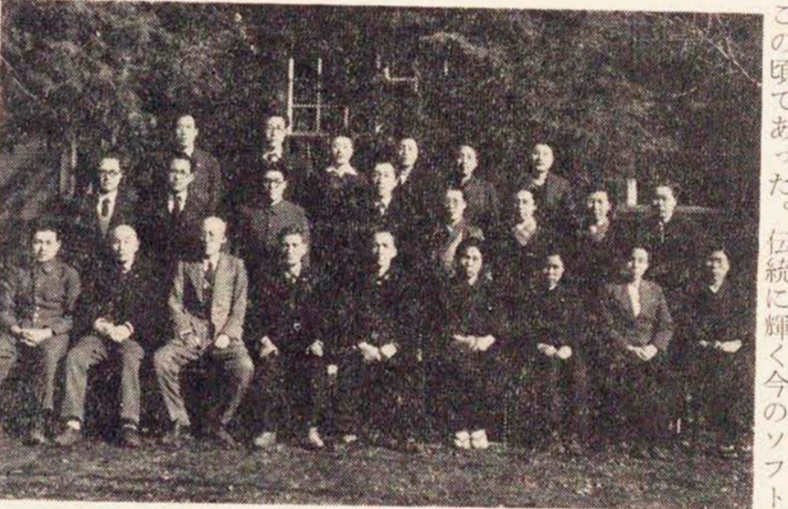
学芸会、発表会、校長訓話、何かことがあると生徒が集まって来た。その昔、軍隊時代将校クラブとして造られた丈夫な建物だからたいして心配ないと思うが、こんなに乗って大丈夫なのだろうか、当時そんな心配をして見守って居たのだ。今になってみればお笑いくさである。今でも天井にその当時の舞台装置の大きな柱でつき破ってしまった穴が残っているはずである。

思えば、昭和二十九年に講堂が建てられるまで、入学式、卒業式もここでやったのだからこの建物も役に立ったものである。今の生徒達から見れば想像もつかないような話であろう。ついでに、その階下には当時の調理室があった。その北側に今の山崎使下住宅があったといっても、だれも本当にしないだろう。それ程二十年は長いのだ。

これも新制高校が誕生した昭和二十三年頃のことだったが、卒業をあと数ヶ月後にひかえた卒業学年で先生がこんなことを調べていた。

もう一年学校に残りたい者は手を上げなさい。顔見合せて生徒のうち何人がサッと手を上げる。こんな妙な風景が各クラスで見

しかし、わずか七年間とはいえず、中等、高等学校と一筋に通った教育の効果は、一番感受性の強い年頃だけに今の教育の比ではなかった。筋金が入った生徒が巣立って行ったのはこの頃であった。伝統に輝く今のソフトボー



ル部がはじめて生まれたのもこうした時代であった。進駐軍の落とし子みたいなソフトボー

ルも各校にクラブをもち戦いながら大きく育って行ったのである。

前中央が校長先生、中列向かって左から三番目のハンサムな青年が何んと副校長先生、また前右から二番目のサム先生です。写真は昭和23年の撮影で若く美しいぞ。左端が斎藤先生です。中列向かって左端が斎藤先生です。まっ黒に日焼けした選手はまさに日本一の顔であった。そのソフトボールが全日本、国体、全関東と三つのタイトルをうばい、五年度が五年後の昭和三十三年のことだったから、昭和二十年の末から三十年のはじめにかけては本校ソフトボールの黄金時代であったわけである。そしてその原動力となった選手達は、当時の中、高一貫教育から生まれた筋金入りの選手達であったのだ。

話しが前後するが、昭和二十三年新制高校が生れたばかりのころ、今運動場の片すみまに淋しく追いやられ、三度目のつとめについたもとの職員室の建物についてこんな話がある。

もと／＼あの建物は今の正門のところにあって大通りに面して建てられて居た。したがって二度移転させられたわけである。

当時講堂はなかった。もちろん今の講堂はその後建てられたものである。だから生徒

られたのである。

今年卒業して旧制高等女学校の最後の卒業生となるか、もう一年残って勉強して新制の高等学校の第一回の卒業生となるか、その希望者を調べている風景なのである。当時全国いたるところで見られた珍しい風景であったろう。そして昭和二十四年三月、最後の高等女学校卒業生が巣立って行った。

かくして残った初の高等女学校三年生はわずか十一名であった。数こそ少なかったが、迷いぬいた十一名の高校生は、誰れを見ても立派な高校生であった。

あれから二十年、もうあの子達も良いオバさんになっているだろう。自分の子が大きくなって入学して来るような年頃になっている

はずだ。

二十年の歳月は、人も物も大きく変えようとしている。短いようだが二十年は長い、過ぎて来たあのころ、このころを思い出して見ると書きたいことはまだ／＼あるようだ。しかし七十年はもっと長い。いろ／＼なことがあったろう。しかし私達が忘れてはならないことは、どんなに長い歴史でもそこには人が生きていたということである。

先輩が居て、在校生が居た。先輩が残したものは後輩が引きついで大きく育てて次の代へ、それは引きつがれて行くものなのである。そしてそれはまた、今この七十年の歴史の中にあるわれ／＼のやらなければならぬことでもある。(本校教頭)

バレーボールの黄金時代

生徒との親しみは今の数倍

小野 孝之

私の勤めていたころの本校は、生徒数も七百人から八百人以内というところで、すべてに家庭的な雰囲気を持たせていた時代。といういかにも「好き時代ですね」と言わ

れそうですが、昭和二十三年から三十七年までという時期なので、終戦後まもないことでもあり、まだまだ物資不足に悩まされていたころである。

そういう中で私たちは草ぼうぼうの元兵舎
あとのコートを整備してバレーの練習をはじめ、私はひとすじにその指導に当たってきた。

猛練習のかがあって三十一年、三十二年と二年連続県下大会に優勝し、三十一年は島根県で、三十二年は山形県で開催された全国大会に出場することができ、ソフトの須賀とならんでバレーの須賀の名声を全日本に誇るようになったのである。さらに三十六年には四国徳島で行なわれた全国大会に出場、大塚PTA会長、菅野教頭、新井、大根田、小谷野先生方の応援を得て根かぎり戦った思い出は本校バレーボール部の黄金時代として、私の一生忘れ得ないところである。

次々と思いつく出をたどってゆくと、まず運動会。運動会は毎年開催し、圧巻は仮装行列。秋にやり、バザーと共に校内行事としてはいちばん楽しいものでした。とくにバザーは「スカさんのバザー」として県下にとどろいていて、展示はもとより、即売に人気があり、全校を使用して賑々しく開催され、即売物の売行きも「飛ぶような」という表現がびつたりとあてはまる盛大なものであった。私は当時、このような行事のまとめ役をやらされ、企画、運営、物の管理、使用ほんど一切の衝に当たり、私でなければ何ができるか。

にあるかもわからないという有様で、そんなときは全くメチャクチャに忙しく、文字どおりテンテコ舞いの体たらくであったが、そのころの職員室は、ほんとうに一致団結しており、「やろう」というと「ヨシ」という返事がすぐ返ってくるという、打てばひびくといった雰囲気、若い力が中心となり、オイ、ソレと活躍した、あの楽しさは、人数も少なかったせいもあるかも知れないが、まさに「須賀魂」といえるものではなかったらうか。

対外的な行事では、何といつても関西旅行の思い出がトップである。四泊五日から、五泊六日となり伊勢、奈良、京都と大休みのコースで、私の勤続十三年のうち、私は十年連続でこの修学旅行の企画、統率の責任に当たったものである。その後の三年間は進路指導に集中したわけだが、——というのは新しく商業科が設置されたもので、就職希望者の職場の開拓にも一層力を入れなければならぬことになったからである。このような先生方の気魄あふれる動きに対して生徒たちの気質というか反応といったものはどうだったろうか。一言でいえば情懐が豊かだったというよりは、むしろ「つまり当時は情懐的、現在はビジネス的ということになるらうか。当時は生徒と先生の接触の場面も

多く、師弟の情もこまやかであった。卒業式での情景、謝恩会はいままでもなく、涙と笑いの感激の場面は随時随所に見られ、その親しみというものは今考えてみてもそぞろに郷愁をおぼえさせられる。したがって卒業生との心のふれ合いも濃く、卒業生からの手紙などもたくさん来るし、ほんとうに家庭的な楽しい学園として、一生印象に残ってゆくことであらう。

これらも時代の変遷とともに変わってゆくことばかりを得ないが、校長先生のお話によると、本校の卒業式などは現在でも他校には見られない情緒豊かなものであるとのこと、家庭的で優しく礼儀正しい、誰からも信頼される人になるという伝統の精神は、いまもなお生かされ「一人は一校を代表する」という生活目標の裏づけとなっているとのこと、また私が、中学校に勤務して本校の生徒たちを外から眺めた場合にも、きちんとして礼儀正しい姿を見ることができると、ほんとうに嬉しく思っている。また一言つけ加えておきたいことは、本校でやらされた数々の経験がその後の私にとってどんなに役立ったか、やらせていただけたことに対して私は心から校長先生に感謝している次第である。(元本校教諭・宇都宮市立瑞穂野中学校教諭)

モンペをはいて入学式

|| 七分づきのおにぎりでも楽しい遠足 ||

園部 シズエ



私が宇都宮高等職業学校の門をくぐったのは、戦争もたけなわの昭和十九年の春でした。私達の時代は学生とは名のみでセーラー服を着ておりましたが、スカート等ははけず、モンペをはいての入学式でした。入学式の最初のお披露も、防空予きんと雑のうという戦争一色のものでした。間もなく六月労働員(農家の手伝)として出征兵士の留守家族の農事の手伝に六月から七月中旬迄まいりました。私にとって田植とか麦刈等はその時だけのよき思い出となっております。

まもなく夏休み。そして二学期、また九月下旬から十月にかけての秋の労働員です。六軒もある道をてくてくと歩いて、そして農事の手伝い、また歩いて帰って来るのです。それでもぐち一ついわずかえってのしみでした。そしてようやく学校にもどれたと思っ

たのもつかの間、こんどは飛行機増産の一員として中島飛行場に学徒動員されました。

冬の寒い日、ガランとした大きな建物の中の作業。それはそれは大変なものでしたが「勝たねばならない」の一念のみならず切っぴがらばりました。ある時などは空襲にあって三軒もある山の中に逃げこみましたが日暮になっても解除にならず、暗くなるのを待って手さぐりで山を下りたのをおぼえております。戦争もいよいよ末期にはいり本土の空襲もはげしくなり、防空壕と作業場との往復でしたが、私達は勝利を信じて一生懸命に飛行機増産にはげみました。そして七月、宇都宮も空襲にあい、一夜にして火になめつくされ私達の学校も灰と化してしまつたのです。翌日私が学校にかけつけた時には、校長先生とハナ子先生が煙のたっている校舎の中にほう

せんと立っておりまして。徒達は学校がやけても後かたづけすらすることもできず、飛行機増産にはげまなければならなかったのです。そして終戦、あの天皇陛下のお声を工場疎開をしていた実践女学校(現在の桜小学校)の校庭できました。その時は涙がとどろく流れてどうしようもありませんでした。

戦争はおわつたものゝ帰る校舎とてない私達は、下級生が臨時にかりていた宇工(現在の宇高工)に集まりました。そこにも長くはいられず、実践女学校(現桜小)と第一女学校(現宇女高)の校舎の一すみをかりて勉強しました。先生方も両方かけもちの授業でそれはそれは大へんだったと思います。卒業式も他校の講堂をかりてのわびしいものでした。そして四月私は専攻科へ進み、やがて現在の校舎に移る事ができました。もと「兵隊屋敷」のこの建物をなんとか女学生の住まいにするのにはなみたいではないありませんでした。机一つないのですから、まず進駐車からはらいさげの机、腰掛、下駄箱をもつて二軒も三軒も歩いて学校にもつてきて、それをたわしでみかいたのです。道具もなんとかまにあわせての生活でしたが、学校に通えるという喜びで二はいいでした。クラブも出来よう

やく女学生らしい生活が出来ないようになりま
した。十一月には、生れて始めての修学旅行
です。大きいリツクを背負って七分づきのお
にぎりをもっての旅行です。日光駅から東照
宮を見学して中禅寺湖で中食をとり、そこか
ら湯本まであるいたので、宿の南間ホテル
に着いた時には日もとっぷり暮れてしまいま
した。それでもはじめての団体生活で夜の更
けるのもわすれてかたり合ったものでした。
そして私達も無事卒業する事が出来ました。
私達の学生生活は戦争のため犠牲になっ
たわけです。封建時代の最高潮である戦争とい

う渦に巻き込まれ、灰色の学生時代だったの
ですが一致団結、心を合わせて一つの仕事に
うちこむ「働く」ことの尊い体験をしたわけ
です。
封建時代と民主主義との両方の歴史のうっ
り交わりを心身ともに体験した一人です。
あすの命もわからず、ただただ働いた私に
は、現在の平和がますます思えてなりません。
この平和がいつまでもいつまでも続いて
ゆくことを心から祈りたいと思います。
(本校職員・同窓会事務局幹事・昭和二十
二年卒業生)

オカッパ姿の寄宿生活

— ためになった舎監の先生のしつけ —

戸室文子(旧姓坂本)

私はオカッパ時代の四年間を寄宿生活で過
ごしたが、前校長の教育を受けられた舎監で
あった渡辺キノエ先生は現校長先生の奥様の
お母様にあたるわけだが、しつけがきびしく
日常生活はもとより、服装容儀についても徹

底した指導をされた。先生は袴をはき、きも
のはいつも錦仙・袴もとも美しく着こなし
ておられた。髪はいつも一糸乱れぬ清潔さ、真
白い足袋をきれいにアイロンをかけてはかれ
ていた。ある日机の上に本をひろげたまよ

た餅のきものをこわして作ったものだが、木
口の手提げ皮靴はまがいもので、雨にぬれた
ら上下分離してしまおうなものだった。学
徒動員として、毎日工場に働きに出かけ、工
員と一緒に汗を流した。

潜水艦の電池を作るのだと、班長など
させられ身を粉にして働いた。お国のため
に身を鴻毛の軽きにおけ」という即ち自分の
ためでなく、国に命をささげることが、本当
の日本魂だといわれ、また教育された。戦争
が悪化し国の旗色があやしくなると、終
戦直前と思うがついに学生がかり出された。
明治神宮外苑に、校旗を先頭に入場整列。芝
生は女子学生が送る立場で居並んだ。男子学
生は黒の金釦の服装、鶯色のゲートルを足に
巻き、総理大臣の東条英機の訓示である。軍
服に身をまとい長い軍靴をはき、目をか
け、どなるように大きな声で、武士道精神
花は桜木人は武士の精神を鼓吹し、日本の国
民の使命は主君に身を献げ、国に身を投ずる
ことにあると話された。血気さかんな学生達
は肝に銘じ両親をわすれ兄弟をわすれ、恋人
をわすれてひたすら南方の戦場に出陣し短い
命を落した。
食糧事情も益々きびしく、味噌汁のみはカ

ポチャの葉、御飯は高りゃん、腹がへるので
おやつにたべる大豆のいっただものを家より届
けてもらって食べた。
昭和二十年八月十五日、工場の庭に一同集
められた。大切なお話が放送されるという。
戦争終結の天皇陛下のお言葉である。天皇の
お言葉を玉音放送といわれた。常に日本は神
の国だ必ず勝つ。万が一の場合にも敵をおい
はらう神風がふいて、上陸はできないのだ、
ということ、またも信じていた国民だけ
あって、果敢とし、きつねにだまされたよう
な気もちでこの放送をきいた。戦争がおわっ
た。落つかない無気味な静けさが町全体をお
よった。戦争は「打ちてしままん」の天和魂
で武装した血気盛んな若者によって支えられ
ていたが、その彼等の怒声と、ピラがまかれ
た。学生は学校に戻され、専門、大学の学生
はくり上げ卒業という形式をとられ、私も卒
業し帰郷した。

上陸したアメリカ兵が、広い屋敷の裏山を
検査にきた。銃をもった兵隊達の姿に女、こ
どもは隠れ押入れにもぐった。その後は「男
女七才にして席を同じうせず」と教わった過
去に比べて一八〇度の転換だ。アメリカ兵に
ブラさがり、真赤な口紅、真白いおしろいの

外出した私は、帰ってから舎監室に呼び出さ
れ、注意された。「あとをしまつてから外
出しないさい」私はこのことを肝に銘じこの
言葉の中に、沢山の真理のあることを知らさ
れました。また日曜日晴れた五月頃と思っ
たが、校長先生を始めハナ子先生、舎監の先生
が、校長先生を連れ立ってハイキングに行っ
たこともなつかしい思い出である。大平山・
唐沢山神社、校長先生のうつして下さった写
真も残っている。このような家庭的の中にも
きびしい寄宿生活を送ったわけである。

そのころ副校長先生は宇高の学生、自宅と
寄宿舎は続いており、二階の窓越しに勉強の
あいまか外を眺めておる姿も時折みかけ、上
級生達はひそかにあこがれ、心をときめか
した様子だった。四年間お世話になった寄宿生
活をあとに私は東京の専門学校に入学した。
大東亜戦争の漸くたけなわになったころのこ
とである。その思い出も印象よくのこって
いる。昔前にみた映画「名もなく貧しく美
くしく」というの題だったが、これは終戦前
の昭和二十年六月からと思うが、空襲下焼夷
弾の落された煙の中を、緋のモンペ上衣、防
空頭巾を被り、右往左往している場面であ
る。私もその一人だったわけで、兄の着古し

女性が目立つようになった。

次の年の九月私は教壇に立った。本校に就
職したのは昭和二十五年九月一日付、奇しく
も今年で恰度二十年になる。私の学生時代に
は五〇〇余名の生徒が現在二、〇〇〇名約
四倍であり、卒業生も一万八千余名である。
家庭的な校舎から、現在のような鉄筋四階建
の新館、また家庭科を中心とした建築で、最
新式の施設設備が使用されている。普通科、
商業科、音楽科、今年度新たに調理科を併設
され、更に高校教育の多様化と時代に即応し
た教育内容である。校長先生は昭和三十七年
七月十三日私学振興のために戻された甲斐あ
って監製賞を拝受され、学校全体の感激で
あった。その式典なども盛大に施行されたこ
とも思い出あらたである。校長先生は現在公
安委員長とし又沢山の職責を果されておられ、
副校長先生も文部省の初等教育課長として將
来を期待されておられた先生で、古い教育方
針に新しい思想を折り込まれ、鬼に金棒で、
母校の発展は期して候つべしというべきで
す。なお、七十周年を記念しての同窓会名簿
も、多年にわたる関係先生のお骨折りと、現
職員先生のご助力により十一月三日に配布さ
れることになったわけです。また同窓会とし

て、前校長の銅像建立の募金が半年がかりで実施されたが、先生を敬慕する卒業生の皆さん方の熱意で予定額が忽ち突破され、銅像が製作され、除幕式をまっぴかりとなつてゐる。袴に紋付を着し、髪は現代調「夜会巻」だそうだが、胸には勲章を下げられた銅像である。明治、大正、昭和とつゞく七十年の伝統ある母校は創立者栄子先生の精神が脈打っているわけである。その精神は「誰からも愛され信頼される人間の育成」を教育目標に

また「一人は一校を代表する」を生活目標とし、高い理想の旗標を掲げている。これから益々発展する母校の八十周年、九十周年、一〇〇周年にと末長く命を長らえたいと思つてゐます。終わりに高校と短大との校舎が離れておるその双方に活躍されていらる校長先生、副校長先生そして御家族の方々の健康を祈つて拙文を措かせていただきます。(本校教諭・同窓会事務局幹事)

ームは県内は勿論、全国のソフトボール界から、打倒須賀高の呼び声が高かつたので、この苦しい戦に勝つ為には、厳しい訓練の連続で、一年間通して休みは一週間たらず、自己を忘れ、ただ目的達成の為厳しい練習に耐えてきたのだ。

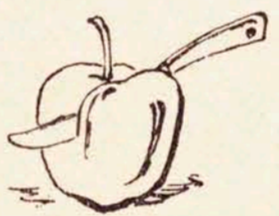
その実が結び本校の連続優勝が決まり、八月三日から六日までの四日間、兵庫東西の宮球場で行われた第十回全日本大会に出場することができた。八月一日早朝私達は二荒神社に必勝を祈願、決意も新たに、両親、先生、級友に見送られ宇都宮を出発、一路大阪に向かった。旅館は出場五回、毎回お世話になつてゐる宝塚温泉相生楼なので気楽に過ごすことが出来た。二日から猛暑の中初練習。出発十分暑さの中で訓練して来たわけだが、あまりの暑さで倒れる者が出る騒ぎ。まず技術の練習より暑さに慣れる事が先決。調整も順調に進み、八月三日待望の開会式及び試合の日が来た。各県から選出された強敵ばかり四十七チームが参加。高校生のプラスバンドを先頭に入場式開始。本校は十八番目、真新しいユニホーム、足どりも軽く胸を張って力強い行進。アナウンスは校名、過去の戦歴などを知らせる。優勝校の筆頭との呼び声が高か

栄光の三冠王

ソフト部

苦しかった戦いのあと

松本照子(旧姓代田)



私はソフトボール華かなりしころ、いわば栄光のソフト時代について書いてみたい。

本校クラブ活動の花形、ソフトボール部は昭和二十六年以て現在まで、県下大会は勿論全日本大会、国民体育大会、全関東大会に出場し、数々の優勝、準優勝の成績をおさめて

った。

一回戦は不戦勝。二回戦強敵の地元代表尼ヶ崎北高。その応援団も必死の応援を送る。本校の応援は校長先生、牧野、新井の諸先生PTA会長の四人。この時甲子園初出場の作新学院野球部の応援をいただき一対〇で勝った。三回戦宮崎県代表高島高と対戦。長打の連続で十一対〇、全国大会初のパーフェクトゲームを樹立、四回戦は埼玉県代表大宮高。互に関東の強敵。両軍チャンスなく四回二死走者三塁スクイズプレー成功、貴重な一点を先取、守り切つて勝った。準決勝は静岡女子商本校選手も試合が進むにつれて余裕も出て来た。昨年も準決勝で破れ、今年こそ決勝戦進出を目指し必死にボールを投げかつた。相手も負けず劣らず好プレーの連続。粘り強さに定評あり学ぶところがあった。まず三點先取、試合終了かと思つたが最終回一点を許し、三対一で勝った。決勝は真夏の太陽を受け午後一時広島県代表安田学園と対戦。ソフトボール競技の王者、過去の成績三勝三敗。本校先攻で試合開始。追いつおわれつ、優勝戦にふさわしい好プレーを展開していたが、ついに四回裏重大なピンチに襲われ、一死満塁。ここで一つとして許すことの出来ない失

策と安打が出たが本校は死力の奮闘に、粘る打者をサードフライに倒し一息入れた。その僅かなスキに三塁走者にホームスチールを取行されたがベース寸前でタッチアウトとし危うくピンチを切り抜けたが、本校にはチャンスの女神が現われず苦しい試合の連続で延長戦に突入、この時ベンチ戦法に作戦をかえた。それが成功。七番打者無死一塁、続いて八番九番とバントで内野陣を混乱させその間二点。一番打者スクイズで一点、一度のチャンスを有効に三點先取。三対〇で本校優勝決定。全日本大会初優勝。選手達はお互にだきあつておさえることの出来ない歓喜にひたつた。海老茶の大優勝旗。銀色に輝く大臣トロフィー。優勝楯が初めて箱根の山を越え関東の地にもたらされたのである。

郷里では優勝祝賀パレードを行ない市民から大拍手をあげた。勝つて兜の緒をしめよで国体県予選八月三十一日優勝、第二次予選は栃木、茨城。優勝にて八年連続国体出場権を得た。第十三回国民体育大会は天皇后皇両陛下をお迎えし、立山連峰の麓、越中富山県下で開催された。十月十七日選手達は二荒神社に必勝の祈願をすませ早朝宇都宮駅を後にした。初めての民宿の幾分不安もあったが富山

県立山町に元気に到着。婦人会、町民の出迎えを受け旅の疲れをとった。北陸の静寂な田園の中に建つ釜ヶ淵小学校。これが私達の宿舎である。朝から夜まで婦人会、村民の歓待振りは過去の国体遠征に例がなかった。十九日総会開会式は富山県宮クラウンドで、市内はすべて国体色に飾られ全県民あげてのお祭り騒ぎ。学校は勿論全部休み。観覧席は立錫の余地もない。文部大臣と御同行の副校長の須賀淳先生もお出になられた。PTA会長斎藤新井の諸先生も観覧席にて入場式を見学。本県選手団はグリーンズのジャンパー白ズボン。団長以下二百数十人が力強く入場。数千人で演奏するプラスバンドも高らかに響きわたる中、万雷の拍手をあげ聖火、そして宣誓に新たな感激を覚えた。一回戦不戦勝。二回戦山口県代表長田学園。二県から一チーム選出とあって強敵補い。二十五チーム参加。一本勝負。闘魂は燃え一対〇で勝った。三回戦は福岡中央高。前二十一回の延長チームで条件は本校や有利とは言え楽観を許せず。五點先取したが雨の為試合打ち切り、五対〇で勝った。この地方では弁当を忘れても傘を忘れるなという言葉通り雨が多い。雨の為試合は二十三日準決勝、決勝を行なうことに決定し

た。準決勝は東京代表神田女学園。練習試合で長短所を知り尽くしているが、二回四球と失策で二死三塁のピンチに直面。だが作戦勝ちで一対〇で本校の勝利、決勝戦は午前十時愛知県代表、安城学園と世紀の熱戦を展開。会場は数千の観衆が一挙一動を見守る中、両軍共チャンスなく投手戦をくりひろげ、何時果てるともなく延長十回に入った。時計は正午を報じ、ここに両軍優勝が決定した。それは団体規定により二十三日正午を以って全競技が打ち切られ、五日間燃え続けた聖火が消えるフィナーレだったのだ。

かくてファンファーレの奏する荘厳の中に本校阿久津主将にざん然と輝く優勝杯が渡された。敵味方の区別なく静まり返った数千の観衆の爆発する拍手に再び栄冠の涙が胸深くからこみあげた。翌日婦人会、町民と別れをおしみつつ魚津水族館、天然記念の埋没林を見学し、車中の人となり宇都宮に向かった。第八回関東大会は桐生市で十一月八日、九日行なわれた。年間二つのタイトル獲得というベストコンディションにあったが、阿久津投手の怪我は大きな障害になった。しかしそれに代る鈴木投手の攻守の活躍で一回戦高槻高を七対一で、二回戦湯田高を三対〇で破った。

準決勝は阿久津投手で再び神田女学園と顔を合せ事実上の決勝戦、白熱戦がくりひろげられたが、曲山の出塁、鈴木が三塁打で一対〇で圧勝。決勝戦は地元代表沼田高と小雨降る中本校先攻で開始され、後半の猛攻は郷間選手の本塁打、鈴木選手の三塁打と長短打で五対〇で三年連続優勝を遂げ、栄誉の有終の美を飾り輝く三タイトルを独占した。かくて読売新聞主催の日本スポーツ賞を受賞し、高校日本一として天下に名をとどろかせた。勝負の世界では勝たねばならない。勝つ為にはお互いに苦楽を共にし、敵しさの中にも理解し合い、精神的訓練が大切だと思ふ。後輩も先輩に負けないよう一層厳しい練習に耐え、目的に向かって頑張ってほしい。今後の活躍に期待する次第である。

当時の選手氏名記録・二年 大島美登理

| | | |
|---------|--------|----|
| 主将投手 | 阿久津 牧子 | 3年 |
| 捕手 | 吉野 久子 | 2年 |
| 一塁手 | 郷間 タネ | 3年 |
| 二塁手 | 渡辺 タイ | 3年 |
| 三塁手 | 篠崎 喜代子 | 2年 |
| 遊撃手 | 大塚 伊佐子 | 3年 |
| 左翼手 | 小島 ユミ | 2年 |
| 中堅手 | 曲山 ユミ | 3年 |
| 右翼手 | 浜崎 マツ子 | 2年 |
| 補欠 | 青木 千代 | 2年 |
| 松本 セツ | | 2年 |
| 菱沼 映子 | | 1年 |
| 鈴木 弘子 | | 1年 |
| 増淵 功子 | | 1年 |
| 高瀬 太平洋子 | | 1年 |

(本校教諭)

明るく快適な新図書館

利用し、購入希望も出してほしい

井上 悠逸

桑滄の変という、ことばがある。今の人々

にはなじめないことばであるが、社会が急

激に変化するということで、滄海(海)であったところが、年代を経ると桑の如くとなつてしまつたといふことばである。どうしてここにこの言葉を持ち出して来たかというに、筆者が、本学園にお世話になつた、昭和二十九年の頃と、現時点では、学園の物理的变化ないし推移を云い表わすのに、この言葉がまったくぴったりだからである。他の「今昔の感にたえない」などという言葉ではどうも具象性にかけられて、ピンと来ないものである。

さて、二十九年と申せば、現一年生の諸君が生れたか生れない頃である。その頃から、現時点までの学園発展の段階を、筆者なりに三期に分けて考えて見たいと思う。

第一期 二十九年—三十五年

この期は、本校の中古時代ともいえよう。現在の正門の所に木造校舎が道路沿いに建てて居り、中門の所は、醤油醸造会社の工場が煙をはき、体育館の所には、製菓会社の工場があつて、コンクリートの大煙突が聳えていたから、北門だけが通用門であつた。従つて

校舎は、本館と講堂及正門の所の前記木造二階建の教室(現新館)と旧図書館とであつたと思ふ。その旧図書館の南半分は、専門部という、一年修業課程の教室で、北半分は、普通教室に使つていたので、図書館の中味は三間四方の書庫だけで、放課後に、前記普通教室を閲覧室に兼用するという仕組みであつた。

第二期 三十五年—四十三年

三十五年前後に、正門の所にあつた木造二階建教室を、講堂の北側に移動改装したが、これが、新館である。同時に、現在の正門が出来た。ついで、家政科教室(二階)が出来て、階下を体育館の合宿等に使用した。引つづいて、体育館が建設されて、大煙突は姿を消し、更に醤油会社の地を合せて中門が出来上り、ここに、正門・中門・北門の三出入口を持つことになる。なおも止まることを知らぬ発展は、鉄筋四階の商業科教室(一号館)の建設となり、ついで同三階の音楽センターの出現を見るのである。この間、生徒数も飛躍的に膨脹して、二千人を突破する大高等学校となつたのである。

さて、この期に於ける図書館の状況を一言しておこう。前期においては極度に狭隘であり、且つ蔵書数も多いとは云えなかつたが、この期に入つてからは、専門部が撤廃されたのでその教室を書庫とし、臨時的閲覧室であつた北の教室を、レギュラーの閲覧室として専用することとなり、蔵書数も六千部を突破し専任の学校司書を置くに至つたのである。

第三期 四十三年以降

これより先(四十二年四月)県都宇都宮の西郊長坂の地を下して、宇都宮短期大学の誕生を見たのであるが、四十三年九月から、宇都宮短期大学附属高等学校と校名を改称して、永年親しまれて来た、須賀高等学校の校名を訣別し、名実ともに生まれ変わったのである。

この期に入つて特筆すべきことは、校長先生の御曹子淳先生が、新発足の学園経営のため、文部省の課長の要職を去つて、副校長として就任されたことである。

眼を転じて、図書館はいかにと見れば、蔵書は漸増して老万部を越え、利用者も閲覧室

に溢れて手狭をかこっていた折も折、四十四年度から、新校舎の建設がはじまり、図書館は、その一階北側に過分のスペースを与えられることになった。そして、四十五年四月、新校舎の落成と共に、旧図書館から、新しい場所に引移ったのであるが、何分、多数の蔵書と備品の移転のこととて、うれしい悲鳴をあげながら、連日、移動と整理とに明けくれること二か月、ようやく六月一日をもって新図書館の開館を迎えることが出来たのであった。近代明色ゆたかな閲覧室で、喜色満面、希望と矜持とに頬をふくらませて、熱心に読みふけている生徒諸君を見ては、係り一同おもわず笑顔を見合わせることもあった。

新図書館の味噌を二、三ご披露すると、館内が明るく快適であること、蔵書数壹万を越え、特に、辞書、事典の種類が多いこと、更に基本図書が完備していること、美術全集の豊富なこと、学習・進学・就職方面の参考書を手広く揃えていること等々、枚挙にいとまがないのである。さて、終りにのぞみ、図書館の今後の方向について一言すると、蔵書数を益々多くし、

学習参考書を網羅完備すること等が希まれるが、一方、利用者である生徒諸君に対して、より十二分に利用して下さること、希望の図

書購入をどしどし申し出て頂きたいことをお願いしてやまない次第である。
(教諭・図書館主任)

社会は決して甘くない

「しんの強い責任感旺盛な人に」

元生徒会長 金井幸子

学園を出て、二年半が過ぎ去ってしまっている今、こうして、ペンを走らせています。三年前の、母校での学園生活が、なつかしく一つ一つ思い出されて参ります。学生時代の自分の生活が、勉強、あるいはクラブ活動、そして、友人達との楽しい語り合い等々、喜怒哀楽の数々の事が、まるで、昨日の出来事のように、なつかしく胸裏にみがえって来ます。三年前に、楽しい思い出を残して、なつかしさを胸にひめて、母校を卒業して、実社会への荒波へと巣立ったわたくしが、今、一人の社会人として、生活して

誰れしも心に思うことは、楽しさばかりです。しかし、世の中に出れば、楽しさに比べず。辛さがいかに多大であるかを下カント知らされました。

また、社会人となった時は、心が躍り、いろいろ考えた事、夢見ていた事を、いざ実行しようと思っても、一つのことには到達するまでに、数多くの障害が待ち構えているのです。しかし、どんな障害でも乗り越えるように、力を尽くして、努力に努力を重ねて前進する心構えが、常に必要だと思ふのです。そうした努力によって、新しい何かを、一つ一つ得て行くのだと思います。よく職場に勤める場合、自分自身でよく考えて決定し、入社しても、三ヶ月にもならないうちに、もう「給料が安い」「自分に職業が合わない」「条件が悪い」などと言った理由で、すぐ職場を変えてしまう人が少なくありません。そして、より以上の条件で、自分に合った別の職場に入社しても、落ち着かない、結局得た結果は別に何もなく、「どこでも皆同じようだ」という事を、度々耳にしています。そんな話を耳にする度に私は、よく「根性」という言葉を

思い出すのです。ちょっととした事にも負けぬ辛さ、悲しさ、苦しさを乗り越えるだけのしんの強い人になるべきだと思います。

そして自分自身で考え、実行に移した事に責任を持って、それを貫く精神で、人間性を、少しでも前進させる為に努力を重ねてほしいと思います。今のあなたの達は、いつまでも温室咲きの花ではありません。やがて母校を出て、実社会の荒波にも、もまれる人となるのです。そんな時、素直に、しんの強い、責任感のある人として、母校を巣立ってほしいと願います。そうしたことの出来る人間性を、学園生活の中で育てて、自分自身に身につけてほしいと、切に思います。

(昭和四十二年卒業)

都心の劇場で学芸会

創立五十周年のころ

「ひめまつ」第五号は、昭和二十六年三月十日の発行で、二十五年の創立五十周年記念

号となつてゐる。この年、どんな記念行事がなされたろうかとしらべてみた。「校友会だより」によると、まず天候に恵まれて秋季大運動会、それから五十周年記念式典につづいて名物「須賀サンのパザール」の開催。そしてこの年度内には「学芸会の都心の開催」という画期的な記録がうち出されている。音楽会、演劇発表会などを宇都宮市池上町にあった民映(民衆映画劇場)において開くという快挙である。記録にはつぎのようにうたわれている。

「生徒会主催の第四回学芸会は、晴天だが風の冷たい三月四日、民映において公演された。この日観衆三千を集め、民映開館以来の最高入場者だった」文字通りPTAの会だつたわけ。

パザールは造花室、被服室、委託販売、受付、華道室、食堂、記念室、手芸販売室、手芸室の各係長がそれぞれの手記を寄せ、当日の様子が雑観風に記録されているのも、なかなかおもしろい。
(手塚記)

戦災、敗戦そして復興へ

—激動の昭和史のなかの本校の一頁—

副校長 須賀 淳

戦後現在地に移る前の本校は、宇都宮城跡三の丸の満々と水をたたえたお堀のほとり、静かな住宅街にかこまれた松が峰、旭町一帯の地であった。(現校長住宅はその一部である。)

昭和二十年七月十二日夜半、この本校はアメリカ軍B29爆撃機の大編隊から投下された焼夷弾によって全校舎が真赤な炎に包まれていた。東京を廃墟と化し、ついで地方中都市の爆撃に移っていたアメリカ軍の攻撃が、いつかは宇都宮におよぼせるであろうとの覚悟はしていたものの、当夜本校の隣の松が峰キリスト教会が燃えあがってもまだ本校はみもむなく、雨あられと降りそそぐ焼夷弾はついに本校の頭上に落下してきたのであ

る。当時私は学徒出陣により陸軍に入隊していたが、体をこわして二十日ばかり自宅療養というところで、学校内にある校長住宅に戻っていた。そのため、創立者である祖母や、そのあとを継いだ父が校長として営々として築いてきた学校が一瞬にして焼け落ちる様子を見ることが出来た。はじめは校庭に墮ちた防空壕に入って爆弾を避けていたが、おしよせる猛火と煙のために呼吸が困難となり、このため爆弾に身をさらす危険をかえりみず、壕を出て裏手の東武電車の土手の草のなかに顔をうずめてそこに残っているわずかの空気を吸って死をまぬがれたのである。

夜が白々と明けそめる頃、焼け跡のけむるなかを遠くから先生方や生徒がかけつけてきたが、このとき、一夜にして灰となった学校の姿を見るなり白いハンカチを目にあててあ

生徒たちのよるこびは、何にたとえようもない。英語は争戦中敵性語ということで禁止されていたが、新時代となり、全校舎がABCから勉強を始めた。私は当時の在校生六百余名全部の英語の授業を担当した。

昭和二十一年三月、晴れの卒業式が借りものの宇女高の講堂で行なわれた。螢の光を歌う生徒も先生も苦しかった戦争中の思い出や母校焼失の悲哀に万感胸迫り、みな泣きぐずりしてしまつたのである。しかし卒業証書は物資不足のなかをやっと工面した立派な紙に印刷し、大きな校印もつくって、私が一枚一枚心をこめて押印した。この戦後第一回の卒業生のなかに現在の事務室の園部先生(旧姓渡辺シズエさん)や、現在三年十二組の松本美智



先生 園部先生(旧姓渡辺シズエさん)の現在三年十二組の松本美智

ど、私立学校ならではのことであった。宇女高などの間借り校舎も三月一杯で期限切れということで心を痛めていたが、敗戦により解体された軍隊の兵舎を借り受けようとする戦災学校の努力が実り、現在の校地である東部第四十部隊(野砲二十連隊)跡に移ることに決まった。借用それから買取とこにいたるまでの果、大蔵省、米軍司令部との接衝の苦心談も語れば長くもつらい物語りとなる。ともかく生徒たちが青空教室で授業という心配も解消する目安がつき、ほっとして戦後第一回の入学試験を宇女高の間借り校舎で行なったが、定員二百名に対し、約五百名の入学志願者が殺到し、(当時は入試は全県一斉、県立学校とかけるとはできなかった。宇女高の先生から母屋(宇女高のこと)より志願者が多いとは、と驚かれたのもうれしい思い出である。校舎もない本校にこのように多数の志願者があつたということは、本校の長い歴史と信用のたまものである。心から感謝をせずにはいられない。

昭和二十一年三月下旬、先生と生徒一体となって新校地への引越しが始まった。私も戸棚や荷物を積んだ大八車を生徒といっしょに引いた。行っておどろいたことには建物(現在の木造本館)の窓という窓にはガラスはあ

ふれる涙をおさえた渡辺ユキエ先生(本校卒業生)の顔や、当時貴重であった白米のおにぎりを大きな器に入れてはやく届けてくれた浜野シゲノ先生(現浜野仁先生の奥様)の姿など、私のまぶたにやきついていて今も忘れえない。

やがて八月十五日、終戦。生徒たちは勤労働員が解除となり工場から続々と学校に戻ってきた。また私も九月一日軍隊から復員して帰宅した。

さて、校舎のない生徒たちをかかえてどうするか、校長先生の悩みは深かったようである。この悲惨な敗戦の直後、工場動員のため卒業が延期されていた専攻科生五十名が廃墟のなかから卒業していった。紙も印刷工場もない当時のこと、生徒各人が持参したありあわせの紙にイモ判の校長印を押して卒業証書とした有名な話はこのときのことである。残った本科生徒は、学校の焼け跡の整理に黙々と働いた。幸いにして果、市当局のあたたかいはからいにより、県立第一高女(現宇女高)と市立高女(現在は桜小学校)の校舎の一部を借り受けることができ、分散授業を行なうこととなった。十月一日いよいよ授業再開。長い工場生活で勉強することができなかった

制服のうつり変わり

この機会にと制服のうつり変わりをたどってみたいところ、創立当初は、制服がなく、紺むらさきのでやかな前掛けだけだったとのこと。共和裁縫女学校時代は、エビ茶のハカマに「共和」の校章というスタイルで、当時の若人たちのあこがれの的だったとのことです。

(戸室文子記)

① 共和裁縫教習所時代

着物は自由、茄子紺むらさきの中広い前掛で正式なものではなかった。

② 共和裁縫女学校

着物、ハカマ(エビ茶)、白足袋、下駄ばき、校章は「共和」の文字が中央、須賀家の家紋、鹿の角をもじったもの両端にあり。うしろに安全ピンで止めたものを左胸につけている。その後バンドは、紺地に白のしま、家紋の鹿の角の中心に須賀の文字が入り、袴の上につける。

③ 宇都宮須賀学校時代

紺のサージにヘチマ袴の変型。スカートはあらいひだ。靴はひもで編み上げたものをはき、腰にバンドをしめた。バンドは茶の地に白のしま。バックルはやたの鏡に、内側凹型に菊の花が配されて、中央に須賀家の家紋がある。

④ 宇都宮女子高等職業学校時代

紺セーラー服にスカート。明るい紺のネクタイ。校



②



②



②



④



④



⑤



②



⑥



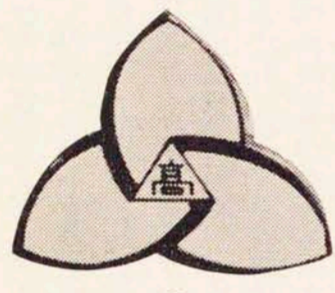
⑥



③



③



⑦

⑦ 宇都宮短期大学附属高等学校時代

制服の色も現代色となり、鉄紺色ジャンパースカートと胸で切替え、箱ヒダ、ワイシャツ、ネクタイで学年別にしている。一年はエンジ、二年はグレー、三年は紺のサージである。上着はセーラーカラーのダブルの四つ釦になっている。今年度より夏服が制定され、スカートは中心箱ひだ両はじに一本内側にひだがとられている。ハカマ式である。上着はホンコンシャツである。

⑤ 須賀高等女学校

制服はセーラーにスカート、袴はカパーなしのもの。校章はローマ字に SUKA に高女、すみれ(?)の花が配されている。

⑥ 宇都宮須賀高等女学校時代

セーラーに、紺のジャバラを配した白の袴カパーがつけられ、校章は「すみれ」の花に「高」。これは昭和天皇の御歌

うつつ伏して 匂う春野の花童

人の心にうつしてかな

のすみれを校章にしたものである。その後昭和三十四年十一月より、須賀の家紋をもじった、白に銀をふちとりした現在のものとなる。

明朗な学園の建設へ

本校生徒会の歴史と現況

本校には数十年前から校友会と呼ばれるものがあり、その校友会を母体として、同好会活動がつけられていた。現在の生徒会は、したがって校友会の発展的解消であり、クラブは同好会の組織化されたものといえるであらう。

現在の生徒会は、昭和二十二年三月三十一日に公布、施行された「学校教育法」にもとづいて発足したもので、高等学校の教育課程に特別教育活動がとり入れられた。この特別教育活動には、ロングホームルーム、および生徒会活動とクラブ活動とがある。学校教育法によれば、生徒会活動には、三つの目標があげられている。

- 一、学校生活を楽しく規則正しいものにし、よい校風を作る態度を養う。
- 二、学校生活における集団の活動に積極的に参加し、民主的に行動する態度を養う。

三、学校生活における自治的な能力を養うとともに公民としての資質を向上させる。

当時(昭和二十三年)いはやく、生徒会を組織し、活動を始めた宇高、宇工、両校の指導を受け、特に宇工の生徒会長には、資料提供の協力を得、初代生徒会長関口さんのお骨折りにより、会則が制定され、昭和二十四年度に本校生徒会の輝かしい発足をみたのであった。

発足当時のクラブは、図書、文芸、書道、芸能、音楽、庭球、排球、籠球、卓球、陸上競技、ソフトボール、ダンス部等小規模なもので現在とは比較にならない。特に御指導下さったのは灰野、大出、土岐、斎藤(現教頭)の各先生方であった。それ以後、次のような会長、役員により、年とともに充実した生徒会活動がみられた。

| 年度 | 会長 | 年度 | 会長 |
|------|-------|------|-------|
| (昭和) | 関口 久子 | (昭和) | 小島 政子 |
| | 相沢 トヨ | | 早乙女ツヤ |
| | 三室 充子 | | 水沼 栄子 |
| | 坂寄 寛子 | | 篠原 昌子 |
| | 枝野 悦子 | | 国田 フミ |
| | 内田 孝 | | 金谷アキミ |

三十六 鷺谷 紀子 三十七 平野 史子
三十八 椎名 君江

| | |
|-----|-------------|
| 副会長 | 上沢 静子、川島 和子 |
| 庶務 | 鈴木 信子、磯 信子 |
| 会計 | 日向野邦子、坂本 道子 |
| | 三十九 川島 和子 |
| 副会長 | 坂本 道子、須崎久美子 |
| 庶務 | 浜野いね子、村上 幸子 |
| 会計 | 磯 信子、中島フミ子 |
| | 四十 須崎久美子 |
| 副会長 | 村上 幸子、小林真砂枝 |
| 庶務 | 浅田 由利、森田三千子 |
| 会計 | 中島フミ子、大木ひろ子 |
| | 四十一 小林真砂枝 |
| 副会長 | 大木ひろ子、金井 幸子 |
| 庶務 | 小倉キネ子、柿沼 トク |
| 会計 | 鈴木 弘子、直井あや子 |
| | 四十二 金井 幸子 |
| 副会長 | 直井あや子、米田 正子 |
| 庶務 | 吉成 文江、細谷 啓子 |
| 会計 | 渡辺ツヤ子、古木 藤枝 |
| | 四十三 米田 正子 |
| 副会長 | 安生 和雄、渡辺喜代美 |
| 庶務 | 細谷 啓子、黒田 幸子 |
| 会計 | 野路 利江、西尾 のぶ |

ために、全生徒を会員として組織されている「生徒会」について、現在の活動の一部を紹介したい。まず生徒会の中心は本部役員と評議会である。本部役員は、会長一名、副会長二名、庶務二名、会計二名、議長団四名の計十一名で構成され、執行機関として生徒会活動の一切の責任を負い、随時役員会を開き行事の企画、運営に当たっている。また生徒会には五つの専門委員会(図書、美化、保健、風紀、編集)が置かれている。特に風紀は近年とみにその激しさを増す交通戦争に対処して交通安全思想の普及にとめるとともに全会員の安全指導にあたっている。例えば、交通安全講話を開いたり、登下校の安全指導(国鉄宇都宮駅前での乗車指導、校門前での横断指導)等をしている。また生徒の風紀を取締り校風の刷新にとめている。クラブも文化部十九、体育部八の計二十七部が置かれ、趣味、目的を同じくする者が集まり共同の活動をしている。

評議会は各HRの室長をもって組織され、評議会に出席する評議員は個人としての意見ではなく、クラス全体としての意見を代表して発言するよう心掛ける。最近では全生徒の

意見がかなり反映されるようになり、生徒会活動の推進力とてかなりの期待がもてるようになってきた。

まず「一人は一校を代表する」の生活目標が決まり全HR、校長室、職員室、その他特別教室等に額縁におさまり、この標語が飾りつけられた。当時の須崎生徒会長は「私たちは、今度できた「一人は一校を代表する」ということを規則とは考えたくない、これはあくまでも私達の生活の指針、生活の目標であって、規則ではない。心の糧、魂の声である」(須賀高校新聞、四〇・七・二〇)といっている。この目標を実現する方法として、

- 学校生活—言葉づかいを正しくする。校則を守る。礼儀を正しくする。学習意欲を持つ。すべての面で積極的に協力し合う。校内を美しくする。
- 社会生活—高校生らしい態度をとる。他人に親切にしてやる。社会福祉に協力する。
- 家庭生活—親への反抗をなくする。家の手伝いをよくする。予習復習をする。両親や兄弟姉妹を尊重する。

- 四十四 高山 三雪
- 副会長 西尾 のぶ、青木みよ子
- 庶務 黒田 幸子、井上 冷子
- 会計 伏木 芳子、牧野 敏子
- 四十五 青木みよ子
- 副会長 井上 冷子、荒牧 正子
- 庶務 加藤 広子、小川原幸枝
- 会計 牧野 敏子、山ノ下洋子

- 昭和三十九年度から選ばれた議長団の顔ぶれは次の通り。
- 三十九 井本恵美子、北条幸子、岩上絹代、鈴木好子
- 四十 柳田美江、海老原智子、小倉キネ子
- 四十一 森田三千子、大貫千代子、中山スミ子、川上和子
- 四十二 川上和子、伴悦子、石川洋子、齋藤幸子
- 四十三 石川洋子、齋藤幸子、三村セツ子、小池知恵子
- 四十四 三村セツ子、鈴木ふみ子、増山美智子、大森マチ子
- 四十五 増山美智子、大森マチ子、大畑栄子、菊地倫子

このように生活をより充実したものにす

の三つに分け討議が重ねられ、実行に移された。この目標の実践化のための学内運動として「優しい心づかいの運動」(昭和四十二年)が生活目標達成の裏づけとして展開された。これには、私達が人間らしく生きる根本的、本質的なものがすべて含まれているので、優しい心づかいの出来る人になれて、はじめ、人間らしい人間「一人は一校を代表する人」になれるのである。という考え方によるものである。また生活目標達成のための具体的実践のひとつとして、「黙想」(昭和三十九年)が定められた。午前と午後の二回、二分間ずつ黙想し、たとえ四分間にもせよ、落ちついて自分自身をみつめ、朝はこれからの一日をどう過ごすか、午後は今日一日をどう過ごしたかを反省して行こうというもので、一応つぎのような項目を心構えの目安として掲げることにした。

朝と午後の黙想の心構えとして
朝、各自自分の責任を果たそう。
何事にもベストを尽くそう。
今日在ることを感謝しよう。
午後、朝の心掛けが守られたかどうかか。

明日することを整理して置こう。
身も心も美しく生きよう。

もちろんこれは大づかみの方向づけなので各自自由に自分の反省事項をもって差支えない。さらに生徒会規則中の役員選挙の規定が一部改正された。(昭和四十三年)

改正前 各役員の任期は一カ年とし、正副会長の選挙は二月に行ない、再任を妨げない。

改正後 各役員の任期は一カ年とし、正副会長の選挙は十二月に行ない、再任を妨げない。

改正前 本会員は、生徒会正副会長の選挙権、被選挙権を持つ。但し三年生は卒業年次によりそれを行使しない。

改正後 本会員は、生徒会正副会長の選挙権、被選挙権を持つ。但し三年生は卒業年次により選挙権のみをもつ。

従来二月に実施されていたものを十二月に変更し、かつ卒業年次により選挙権が与えられていなかった三年生にも選挙権が与えられ最上級生としてのしっかりした判断力が求められた。また学習意欲を高め、高校生としての教養をより豊かなものにするため、「学級

文庫の設置」(昭和四十五年)が提案され、決議された。人間をつくるには、まず読書、本を読む事、読んで考える事、考えをまとめて書くことが必要だと思ふ。人間形成の基礎となる普通教科の履習はもとより大切であるが、それにもまして必要なことは人間をつくること、実生活に直結する人間形成のために生徒会活動を通して、読書問題についてはここ教年特に力を入れて来た。前にも述べたように、生徒会活動は学校教育の一環としてきわめて大切なものであり、この活動を通じて生徒諸君は学校生活をより充実したものにすることができるのである。すなわち、生徒総会において、日頃考えていることがらを発表し、大勢の批判を受けること、生徒会行事に積極的に参加すること、役員選出においても責任をもって、これを行なうなど「学習の場では得られないさまざまな体験を通して、大きく成長することが出来るからである。今後本校生徒会が全会員の積極的な協力を得、更に健全で明るい生徒会へと発展して行くことを希望して筆をおく。

(生徒会顧問・伊沢雪夫)

須賀学園七十年の歩み

明治三十三年十一月三日

創立者、須賀栄子先生、宇都宮市西端田町に共和裁縫教習所を創立す。

明治三十四年七月

共和裁縫女学校と改称す。

明治三十七年十月

宇都宮市日野町に移転、別科を置く。

明治四十三年十月二十日

第一校舎を新築し、宇都宮市河原町(現在校長宅地)に移転す。

明治四十四年十一月三日

創立十一周年記念式を挙行す。

大正二年九月

第二校舎を増築す。

大正四年十一月

大正天皇御大典記念として校旗を制定す。

(本校旗は昭和二十年戦災によって焼失)

大正五年六月

第三校舎を増築、補習科を併設す。

大正十年二月

編成を改め、補習科を第一専攻科、別科を第二専攻科と改称す。

大正十二年

新校歌を制定す。

大正十二年八月

第四、第五校舎を増築す。

大正十三年三月二十四日

校名を宇都宮須賀女学校と改称し、本科甲部(四年制)、本科乙部(二年制)を置き

第一専攻科を研究科と改める。

大正十三年十一月三日

創立二十五周年記念式を挙行す。

昭和二年十一月

果下初のバザーを開催す。以後毎年開催し宇都宮の名物となる。

昭和七年四月

校名を宇都宮女子高等職業学校と改称し、本科甲部を一部、本科乙部を二部と改め

る。

昭和九年十月十四日

創立者、須賀栄子先生逝去、須賀友正現校長就任す。

昭和十一年十月十四日

同窓会によって創立者須賀栄子先生の銅像が建立される。(本銅像は、昭和十九年戦争中の貴金属供出によって国に献納された)

昭和二十年七月十二日

戦災によって全校舎焼失。

昭和二十年九月

県立学校の校舎を借用して授業を再開す。

昭和二十一年三月

宇都宮市西原町の現在地(元陸軍野砲連隊跡)に移転。

昭和二十一年四月

須賀高等女学校に組織変更

昭和二十二年四月

学校改革により、須賀中学校を併設。

昭和二十三年三月

財団法人須賀学園に組織変更

昭和二十三年四月

学制改革により、宇都宮須賀高等学校となる。

昭和三十九年二月十一日
鉄筋一号館新築落成す。

昭和三十九年四月一日
音楽科設置

昭和四十年一月二十二日
音楽科特別校舎新築落成す。

昭和四十年十月十七日
宇都宮市下荒針町長坂グラウンド開設記念運動会を挙げる。

昭和四十二年四月二十九日
宇都宮短期大学(音楽科)を設置。

昭和四十三年七月十八日
副校長須賀淳先生就任。

昭和四十三年九月一日
校名を宇都宮短期大学附属高等学校と改称す。

昭和四十五年四月一日
高等学校に調理科を新設。

昭和四十五年十一月三日
同窓会によって創立者、須賀栄子先生の胸像を再建す。

昭和四十五年十一月四日
創立七十周年記念式を挙げる。

(斎藤太嘉男記)

昭和三十四年十一月二十五日
日本スポーツ賞受賞

昭和三十四年十一月三日
新校旗、新校章を制定す。

昭和三十五年十二月二十日
創立六十周年記念第一回定期演奏会を開催す。

昭和三十六年二月十一日
創立六十周年記念式を挙げる。

昭和三十六年九月十六日
体育館 新築落成す。

昭和三十七年四月
制服改正(現行)

昭和三十七年五月十四日
須賀友正校長、教育功労者として藍綬褒章を受賞す。

昭和三十七年十一月三日
オーケストラ、NHKに器楽合奏コンクール全国第二位となる。

昭和三十八年十月十四日
創立者、須賀栄子先生三十年祭挙行、全校生募参す。

昭和三十九年二月十一日
須賀講堂新築落成す。

昭和三十九年四月二十九日
家庭科特別教室落成す。

昭和三十二年十二月
ソフトボール、トリプルクラウン賞獲得。

(第十回全日本高校優勝八月九日、第十三回国体優勝十月二十五日、第八回全関東優勝十一月十日。)

昭和三十四年十二月
須賀学園家庭専門部を併設す。

昭和二十五年十一月三日
創立五十周年記念式を挙げる。

昭和二十六年一月
私立学校法の施行により、学校法人須賀学園に組織変更。

昭和二十八年十月十四日
創立者、須賀栄子先生二十年祭を挙行、全校生募参す。

昭和二十八年十月二十九日
ソフトボール部、第八回国民体育大会に全国初優勝、市内祝賀パレードを行なう。

昭和二十九年二月十一日
須賀講堂新築落成す。



旧須賀栄子先生銅像
(宇都宮市河原町時代校舎正門左側に建てられたもの)



旧校舎
(宇都宮須賀女学校時代)



あつ！私だ！なつかしいですね。 大正十三年全校生の宇都宮市八幡山公園散歩 (加藤いよ子氏所蔵)

校旗・校章 校歌のこと

手塚 武

校旗とか校章、校歌などは、私たちのごく身近にあるものなのに、その由来やいわれなどについて詳しくお話のできるひとは、きわめて少いようである。そこで、ちょうどよい機会なので、誌上で紹介し、記録して残しておくことにしよう。

校旗 校旗は学校のシンボル中のシンボルといえよう。軍隊でいえば軍旗のようなものだ。したがって校旗が出場するのはおおむね正式の儀式の場合に限られている。

本校の校旗は、昭和二十年七月十二日夜の空襲で焼失したものを復活し、昭和三十四年十一

月三日創立十周年記念行事の一環として、当時のPTAおよび在校生の協力のもとに制定されたものである。

校章 須賀家(上州館林藩士須賀忠岐守の家系)の家紋「鹿の抱き角」に、「須賀」の文字を配したもので、金銀の刺繍がなされている。

文字 「須賀」の文字は、現校長須賀友正先生の自筆で、金刺繍がなされている。

羊頭 新制定の校章で、洋銀が用いられている。

生地 純白の綾錦で、清楚かつふくよかな感じがある。

フレンチ 四段金糸となっており、

全体として、気品に充ち、格調の高い校旗といわれている。

校章 一般にすみれの花になぞらえたもののように思われて

いるが、実は片かな「ス」を三個組み合わせて図案化した須賀家の合印で、その中央に「高」の文字を挿入してある。合印とはいわば目印のようなもので、昔戦場で敵味方が入り乱れてたたくとき、味方の腕につけさせ、敵か味方かが見分けられるようにしたものである。

これは須賀家の過去帳から現校長が考案したもの。

文字は金色、生地は純白色ですっきりとしていて、いかにも純潔な感じのする校章であるといわれており、校旗と同様六十周年記念行事の一環として制定された。

校歌 「二荒の高嶺を 遙かに仰ぎ」ではじまる本校々歌は作詞を当時栃木師範学校の主事をしておられた菅谷徳次郎先生(国漢担当)に、作曲は同校で音楽を担当しておられた野原幸夫の両先生にお願ひして作成されたものである。

大正十二年の制定であるから約半世紀前のことになるが、戦中戦後を通じてうたいつづかれ、その間時代的な抵抗を何等感じさせない作品であることはほんとうの教えの道が、この校歌の中に象徴され、脈々と生動しているからであろう。昭和二十年敗戦後の教育界は思想上の大混乱をきたし、学校のシンボルである校歌も、理念の変革とともに、新しく書きかえられたり、手直しを必要とした学校もあつたが、菅谷先生のこの校歌はまったくその必要がみとめられず、そのままいまに引きつがれ歌いつづけられている。このことは、先生の詞藻がいかに高く豊かであつたかを物語るものであろう。(教諭)

多様化の中での人間教育を



本校学習指導の理念と実践

大 島 威 二

はじめに

自覚ある人間を

生徒会誌「ひめまつ」の編集係から、創立七十周年記念号に、本校教育の特色の紹介文を載せたので、学習指導の立場からそれを書いてほしいという依頼を受け、少なからず戸迷いを感じた。それというのも本誌を読まれる生徒諸君は、毎日本校に学び、その教育内容については肌で十分感じ取っているはずだと思っただけだ。しかし、諸君がよく知っているはずのことを、改めて書いてみることも、みなさんの学園生活の反省と確認の一助となるかと思ひ、筆をとることとした。文題がやや固苦しくなってしまうが、本文では、本校の学習指導に関し、単に現象面だけでなくその本質に触れつつ、できるだけ平易に述べていきたいと思う。

装いも新たな新本館を閣下にお借り、創立者須賀栄子先生の銅像が、生徒の遺徳を偲ぶ多くの卒業生の献金によって建てられた。静かながら厳しいお姿である。

創立当時、栄子先生は、新しい国家社会の発展の礎は健全な家庭の建設にあると考えられ、真にその使命を自覚し、その任を果し得る女性の育成をめざして本校を創設された。

当時、男尊女卑の封建的遺風が根強く残り、女性は家庭的にも社会的にも低い地位にありその女性の真価を顕現させることこそ日本が真に近代国家としての地を固めるための急務と考えられたのである。

本校の教育について、栄子先生のこの建学精神と教育理念に言及せずには論ずることはで

きないのである。つまり、本校の先生方は、広く社会の現実と将来、そして、生徒一人一人の将来を見通して、それぞれの学習指導に当たることが基本的な姿勢としていた。同時に、生徒諸君は、ただ目先の進学とか就職という目標に向って頑張ることだけでなく、各人が、将来果すべき使命をしっかりと自覚した上で、現在の学業に取り組むことが大切なのである。君たちは、一人一人、今後進んで行くこととして社会的各分野で、たとえそれが目立たぬものであるにしても、本当に尊い役割を果すことになるのである。現代は、人間が機械文明と情報文明に翻弄され、個人が組織社会に埋没してしまう危機に立たされていると言われるが、このような時代にこそ、個人の尊厳と、各自の社会的使命に、先ず自分が自覚め、さらに、その尊厳と使命を十分に発揮し得る力を備えることが必要とされるのである。従って諸君の学業は、単に習得した結果だけにより評価されるはず、目標を見出し、学ぶ意味を悟り、そして学ぶ姿勢を正すことが根本的な問題なのである。そして、高校生である君たちは、すでに誰もがこの根本的な課題に立ち向う力を持ち合わせているのだ。この自覚ある人間造りの教育方針

を高校生活全般にわたって言い表わしたものが、「一人は一校を代表する」の生活目標であり、この生活目標は、将来、一人は一家、一会社、一県、一国……を代表する、と進心的に発展されていくべきものである。

自分の特性と実力を発揮することは、誰にとっても大きな喜びであり、生き甲斐であるのだ。また、それが、自分への誇り、生きてゆく自信につながるのである。本校の先生方は学習指導あるはクラブ活動等の指導に当たり、得意学科を、特長を、趣味を存分に伸ばすことに力を注いでいるゆえんがここにあるわけである。また、専門教科の実力を十分身につけ、同時に家庭人、社会人として広い教養と健全な常識を涵養することに精一杯の努力を促しているのも、諸君の将来の生活に備えてのことである。各専門教科の指導にあつては、それぞれ施設、設備を活用して特色を發揮しているが、その説明は、ここでは省かせていただく。そこで、一般教養科目の指導において、重点目標として先生方が力を入れておられる点を二、三述べておこう。先ず、

いくつかあるが、その中から、最後に、物への愛、人への愛、自分とかわりのあるすべに對する愛情を育てる指導を掲げよう。これは博愛といった高遠な理想を抱かせようというのではなく、むしろ、身近かで、日常的な場における、実践を通じた指導を目指しているのである。物を大切に、生命を尊び、先人に感謝し、そして、すべての良い芽を育てること。その良い芽を育てるには、時には大きな勇気を、時にはねばり強い実行力を必要とするのだ。また、これは生活指導における「やさしい心づかいの運動」の指導と相呼応しているのである。

— 43 —

多様化の中で個性と実力を

家庭婦人育成の女学校として創立された本校は、時代の変遷、社会の進展に際し、今日見る家政、普通、商業、音楽、調理の各科目を擁する一大総合高校にまで発展してきた。現在、生徒のみならずは各科目であつて、さらにいくつかの専攻に分かれて、より専門化された知識、技能の習得、あるいはより個性と将来の進路に合った学業に励んでいるわけである。この本校教育の多様化ということは、勿論今日の高校教育の一般的趨勢に沿うものである。しかし、本校における教育の専門化は決して、専門教育の徹底のみを目指すものではないのである。やもすると画一的な教育に陥りがちな今日、この多様化の中にあつて生徒一人一人の個性を十分に伸ばしていくことを目指しているのである。人間が、学業面であれ、個人生活の面(たとえば趣味とかスポーツ)であれ、あるいは職業の分野であれ

考える力を養うこと。これは、国語の授業ばかりでなく、全教科、H・Rの読書指導、さらに、外部の作文募集への応募等幅広い指導の場で実践し、その成果も上りつつあるものと思われる。次に、豊かな情操と創造力の涵養。現代の社会に真の人間の潤いをもって生きるには、この二つの要素は、極めて貴重なものである。他に学習指導の重点目標が

本校では以上のような大きい方針をもって先生方が、毎日の授業の指導に当たっているのであるが、その指導が真に実りあるものになるには、一に君たちがその指導をどのように受け取るにかかっているのである。創立七十周年を期に本校の先生も、あらためて創立者の意を体して、諸君の指導に専心しようとしている。みなさんの自覚と奮起を大いに期待してやまない。(教諭)

— 42 —

おわりに

本校では以上のような大きい方針をもって先生方が、毎日の授業の指導に当たっているのであるが、その指導が真に実りあるものになるには、一に君たちがその指導をどのように受け取るにかかっているのである。創立七十周年を期に本校の先生も、あらためて創立者の意を体して、諸君の指導に専心しようとしている。みなさんの自覚と奮起を大いに期待してやまない。(教諭)

誰からも信頼され役に立つ人間を

—本校生活指導の方針について—

手塚 武

創立者須賀栄子先生の徹底した人間教育の根本精神は、時代の變遷に適確に呼応しつつ、ゆるがぬ生活指導の方針として、戦前戦後を通じて脈々と鼓動しつつ現在にいたっている。

生活指導は、本校の生活目標である「一人は一人を代表する」ことのできる人になるにはどうすればよいか、どうすれば一人ひとりが「一人は一人を代表する」という大目標を達成することができるか、このポイントに向かって努力を集中している。

それには、まず第一に、学園を明るく楽しいものにして行かなければならない。生徒たちが美しい環境の中で、真剣に授業にとりくみ、本分としての学習にうちこみ、かつ心のたすまいを正して行くことのできる雰囲気をつくること。これには施設の充実もさることながら、生徒たちの心構え——自覚と誇りを持って一日一日を大切に、より充実した

のものもっていくよう指導している。

そのためには、生徒手帳その他に定められた校則を守ること、校則に違反する行ないがなければ、叱らない、叱られない理想的な教育の場が当然生まれてくるので、学園はおのずと明るく楽しいものにならざるを得ないわけである。

この理想的な教育環境の充実に努めながら生活目標達成のための具体的、実践的な推進力として、生徒会を中心として「優しい心づかいの運動」を、全学園運動として展開している。優しいとは、優美、素直、おとなしい、親切、いたわりの心、情深い、情がこまやかである、けなげである、殊勝である、神妙である。

また、非行は早期発見、早期治療に当たることを基本方針としている。予防医学の立場である。まず行動観察の徹底が第一。観察のポイントをプリントにし、全部の職員が一応の目安をもって個別観察ができ、ひいては家庭訪問時のテーマまでを付してある。非行に走るのには必ず原因がある。その原因を追求し手当てをする、指導の要諦は「緩厳よろしきを得る」にある。甘からず辛からず、きびし過ぎてもいけないし、甘やかすぎてはなおよくない。湯かげんと同じでちょうど入りこるがよい。長いお説教はダメ。注意はその場で、二、三分。人前では決して人を叱らない。長所をみとめほめてやる。折にふれ一声かけることを忘れない。偏愛しない。教室では特定の者ばかり視線を向けない。万べんなく視線をやる等々、現場では、ほんとうに細かい注意力が要請されるのである。

年齢や経験によって個人差はまぬかれないうところであるが、私はそれらをうち越えて誰にでも共通にいえることは「一生懸命」にや

ある、温順であること等の意味であり、私達が人間らしく生きる根本的、本質的なもの(愛といつてもいい)がすべて包含されている。この意味深い「優しい心づかい」をみんながそれぞれの生活の場で実行していきさすれば、ほんとうに「一人は一人を代表する」人になれるのだという考え方である。これについては、実践の具体項目として学校、社会、家庭生活の三項についてそれぞれ適切な目標が選ばれ、その中の二つ程を重点目標として取り上げながら、積み重ね方式によって実施するようにしている。

その要旨は、本校七十年の歴史と伝統の底流を脈々として流れている「礼法を正す」ということと「己れに厳しく他人には寛大であれ」(相手の身になって考えて行動する)という二つの柱を軸とし、それにねばり、がんばり、ふんばり、しんばり、つっぱり、五ばり主義——逞ましい意志(根性)の力とそれを容れる体力とを養って行こうという三点にしばられる。

これらを人間像として描いてみると、①健全な常識を持った人 ②豊かな情操を身につけた人 ③明るい社会性を備えた人、大づかみに言ってこの三つの要素をつちかい育てる

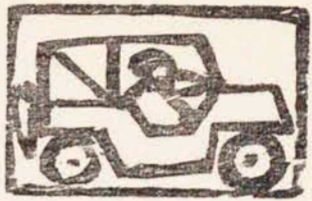
ことになるであろう。これを要約すれば「人間として誰からも好まれ、信頼され、役に立つ人間をつくる。」ということになる。

これらを踏まえて、まず進路は早く決めて早く準備することが第一。三年になってからでは遅すぎる。一、二年から、特に夏期休暇を利用して家庭内の相談をまとめておく。これには学校の配慮ももちろん必要なので、三学年を通じたプログラムにしたがって計画的に指導に当たり、同時に生徒たちの自発的な考えをうながし、従来三年生だけに実施している保護者との面接を、一、二年生にも実施するよう着意している。このことについてはPTA各支部の総会の際、担任が全部各地区に出張し、父兄と面接することになっているので、現在でもおおむねその目的を達成はしているが。

次は一人ひとりの生徒の能力の開発がある。個々の生徒の個性能力、適性、希望、興味、体力等をよく把握し、キメ細かい指導を行ない、それぞれの力に応じて各人の能力を開発し、豊かな人間性を身につけるよう着意している。そのためには私たち職員は、できる限り生徒に接し、卒業までには、どの生徒とも話し合う機会を求め、理解を深め合い、

自信と誇りをもたせて行きたい。少くとも全校生の三分の一くらいは名前と顔が同時に浮かんでくるくらいまで生徒たちと親しくなりたいと念願している。

おわりに、特技をもつということは大切である。このことについては他をもつて代えられない、というその人でなければできないという、技能技術を身につけることである。これは一朝一夕にできることではない。日々刻々の努力の積み重ね。この実践あってはじめてできることであってあせってはダメ。牛の歩みを、馬では疲れが早くくる。分に応じ、背伸びをせず、能力に応じて着実に向上してゆく。この心構えを、本校三年の生活の中でつちかい育てること、これは大変な大仕事なのである。(生活指導部長)



明るく素直でまじめ

本校卒業生の社会的評価

職業指導主事 村岡至

◇本校における職業指導方針並びに現況

本校は明治三十三年創立以来、当時の社会思潮であった健全な家庭婦人(良妻賢母という表現の意味する)の育成を目ざしてきたが、戦後社会の求むるところにいたが、昭和二十三年四月学制改革当時、従来の家庭科、普通科に加えて商業科を充足させることになり、社会人として直ぐ役立つ実務的女性の育成にも当ることになった。三十八年四月からは、県下にもまれな商業実践教室をもつ鉄筋四階建の商業科校舎を新設し、理論と実地をかね合わせた教科課程にもとづく教育方針のもとに現在一年生は二クラス、二年生は三クラス、三年生は三クラス、計八クラスの商業科生徒たちがそれぞれ専門の教科および

技術の習得に当たっている。なお、卒業生の就職希望は家庭科、普通科の全般にわたっている。本校においては、家庭科および普通科にも、家庭経営および商業科の実技科目を必修科目として課し、また商業科には家庭一般を必修科目とする等の配慮を行ない、時代の要請に応じた教育を実施している。就職希望の状況は商業科はほとんど一〇〇%、家政科は七五%弱、普通科は約六〇%というのが現状で、ほとんどの卒業生が希望する職業に就職している。ちなみに、昭和四十四年度卒業生六八一名のうち就職希望者四〇〇名でこれに対する求人会社数は約二五〇〇社、求人数は約二〇、〇〇〇名(約八〇倍)という数字を示している。

◇全職員の協力体制

就職指導の実務は、職業指導主事および三学年主任を中心に、三年の学級担任、その他の関係者が当たっているが、日ごろの産業教育あるいは啓蒙工作にはHRの担任の先生をはじめ全先生のご協力をお願いしており、同時少しくともよい職場を開拓したい趣旨から各先生方にもよい縁故先などをお世話願っているが、これに対しては校長、副校長先生をはじめ多くの先生方の協力が徒られ、多大の成果をおさめている。職業指導主事は、全体の総まとめ役の地位にあり、時々刻々に入ってくる情報をまとめ、分析し、必要な情報は朝礼時全職員に連絡し、全職員が「いきをおかせ」「心を通わせ合って」よりよい実績をおさめるよう志向している。なお各学年ごとに、進路指導係を設け、一年から三年まで全学年を進んで進学、就職についての関心を高め、進路は早く決めて、早く準備する「基本方針」のもとに、その実現に努めている。要するに職業指導係としては、本人の将来の幸福と、現在を楽しく伸びのびと生活させるためにはよりよい職場を開拓し、その職場においては卒業生たちが「他のいずれの高校の卒業生よりも秀れている」との評価をもちとることが先決問題である。したがって「よい職場の開

拓には、こちらから積極的に出向いてほしい」との意気込みのもとに努力している。そのためには単に一係、三年担任だけの力では到底及びがたいので、全学園をあげてのご協力をお願いすることとしている。

◇キメの細かい親切的指導

三学年は年度頭初から毎週水曜日放課後に定例学年会議をひらいて、案をねり年間計画を立て、刻々入ってくる情勢に即する処置を講じながら、事務的処理を進めている。
①進路希望調査を実施する。②個々の父兄との進路に関する懇談会の実施。③各種テストの実施。④「就職試験問題集」を持たせ、入社試験に対応する準備をさせる。⑤作文能力をつけさせる。⑥指導室作成の「就職模擬試験」を行なう。⑦全員に模擬面接を実施する。⑧規定の提出書類を完全に作らせるための指導を徹底。⑨先方より指定の様式のある場合はとくに趣旨に反しないよう細密な指導をする。⑩新聞雑誌、単行本等を読むことを奨励する。
⑪就職先の選択にあたっては、生徒一人ひとりの個性、適性、能力、技能、興味、希望

にもとづき、通勤時間、希望地、父兄の意見などを総合的にとりまとめ判断して、本人にとつて最適と思われる職場のあっせんに努めるようにしている。②職場を知ることがもつとも大切だと思われ、係は努めて見学を実施してその実態の把握に努め、生徒に対しても事前に先方と連絡して、できれば父兄同伴で見学させるよう指導している。③職場は表面に現われた給料その他だけで判断せずとくに労務管理が行きとどいてるか、親切で面倒見のよい、明るい快適な職場であるかどうかという点に重点を置き選択していることは本校独自の特徴であろう。寮の状況などについても特に調査して入寮させている。④定着度の調査、予後調査の必要性を認めて、昨年追跡調査を行なった。職場変更は必ず係に通報するよう厳重な指導している。⑤県内と県外就職に対するあっせんは、せっかく大企業が進出してきていることなので県内への調整が重点をおいている。⑥どんな職場にふり向きたいか、電気器具、自動車関係、縫製等の産業関係をはじめ、経理事務、デパート、スーパー等を主軸とする販売関係部門、事務系統、生産部門共に内容中心に中以上のいわば大企業へふり向けてはいるが、従来からの

関係職場も多数あるので、おたがいによく理解し合っている職場は大切に、今後成長度の高い、かつ本校に対しては好意的な特殊な関係の職場をも多くつくってゆく、積極的な姿勢も整えている。⑦今年度のあっせんは八月一日から開始され、八月中には終了する職安の方針であったので、本校としては、その線に沿い必要書類の準備は六月中にも完備させ、余分の時間は面接その他の指導に当たると担任一同努力してきた。出願書類も同一書類を三通くらい準備しておき、職場も三つまでを準備させておき、受験させるが結果ははじめにきまった職場に行ってもらうことを原則としている。出願の月になってもまだ方針のきまらない生徒はないように、ご家庭の協力もお願いしたい。⑧優秀な生活ほど県内にとどめておきたい。県内産業を大いに振興させたい、県外で、どんなによくやってもらっていない、県内でよい成績をおさめてもらうことの方が、やはり地域に貢献するという意味において望ましいと思われるからである。なお、本校卒業生の社会的評価は、地味だがまじめで、かげひなたなくよくやる。明るく素直である。休まない等々好評なので皆さん方の一層の努力をお願いしたい。

一人びとりの力に応じて 各科とも一流大学を目ざして精進

本校進学指導の方針

進学指導主事 松 井 季 雄



商業取引の実習風景……1号館商業実践室

戦後に於ける教育制度の改革により、女子も男子に劣らぬ教養と知識、技能を身につけることが可能になったため、大学進学を志す女性が多くなった。

本校卒業生の中にも多くの人が大学教育を受け、家庭婦人としてまた優れた社会人として活躍しているが、本校の生い立ちが、家政科であるため家政科方面の大学に進学している卒業生が多い。しかし、数年前男女共学の音楽科が増設されてからは、この科の卒業生全員が音楽大学へ進学し、すでにその方面で大いに活躍している。最近、高校進学率の急上昇とともに、高校教育の多様化が問題になってきているが、本校では、昭和四十五年度から調理科が新設された。この科の生徒の大部分が男子で占められているため、今後は、この方面への大学進学者もあることと思う。因みに、過去数年間に於ける主な進学校を

挙げてみると、次のようになっている。

- イ、普・商・家政科卒業生
共立女子大、昭和女子大、実践女子大、和洋女子大、東京家政大、武蔵野女大、日本体育大、女子栄養大、大妻女子大
- ロ、音楽科卒業生
東京芸術大、桐朋学園大、国立音大、武蔵野音大、上野学園音大(以上四年制)、宇都宮短大をはじめ一流短大。

ハ、その他、各種学校には毎年多数の進学者がある。

次に進学指導の現況を簡単に述べてみよう。本校は、普通科、商業科、家政科、音楽科及び調理科を有する総合高等学校である。そして各科とも、それぞれ素晴らしい特色をもっている。従って、進学指導の方針は、これら各科の特殊性と、生徒の能力、希望、適性等をふまえて、生徒各自の志望が達成されるよう教職員協力の体制を確立して、指導の徹底を期することになっている。

◇各学科の指導方針

- イ、普通科Ⅱ女性として知識、技能が修得できるような大学及び各種学校をすすめる。主として、文科、芸術、家政系専攻学科を志望させる。
- ロ、商業科Ⅱ職業婦人として知識、技能が

って、志望校を選定させることは賢明なことである。

ハ、進学校について研究をすること。

学校には、各種の進学に関する資料がある。例えば、全国大学の内容紹介書、入試の方法等を詳述した学園新聞、入学難易を調査した大学のランキングの紹介書など。

これらを利用して大学の内容を調べ生徒の希望、適性に合致した大学を選ばせること。

なお、進学に関して考慮すべきことは多々あると思うが、とくに三項目にとどめたい。

ここ数年内に大学の数は急増した。大学の選び方によっては、従来に比べ速かに入学しやすくなったことと思う。

入学当初は、大学進学を志していても、卒業学年になって、学力を過少評価して進学を断念する者があることは誠に残念なことである。事情が許す限り、高度の教育を受け、日進月歩の実社会に対処していく十分な教養を身につけることは、実に大切なことであり、又ゆたかな人生を送るにも必要なことであると思う。

修得できる大学及び各種学校を選択させる。主として、経済、商業専攻学科設置の大学を選ばせる。

ハ、家政科Ⅱ家庭婦人として知識、技能が修得できる大学及び各種学校を選択させる。主として、被服、保育、食物専攻学科設置の大学を選ばせる。

ニ、音楽科Ⅱ実技担当教官と緊密に連絡し音楽専攻学科設置の大学を選択させる。とくに実技担当教官の独断を避け、各関係担当教官とも十分連絡をとるようにする。原則として、本大学への進学をすすめるが、十分な能力を有し、且つ四年制大学進学を希望する者に限り、一流音楽大学へ進学させることを考慮する。

ホ、調理科Ⅱ更に栄養士の資格取得希望者は、食物、生活学科設置の大学を選択させる。

しかし、何れの学科卒業生も、本人の能力と、努力次第では、如何なる大学にも進学は可能である。

次に、本年度の努力点と留意点について述べることにする。

- (一) 努力点
イ、志望校の早期決定。
ロ、個人面接により、個性と能力に合致

した指導。

ハ、父兄との面談による進学校選択上の問題点の究明。

ニ、校内実力テスト、大学模擬テストの計画的実施と、その活用。

ホ、各種進学指導資料の活用。

(二) 留意点

イ、家族全員の協力を得るようにすること。

進路を決めるには、決して、自己本位で決めることなく、家族全員の意見を求めかつ、了解を得るようにして、家族の総てからあらゆる援助が与えられるようにしておくこと。

ロ、学力に応じた志望校を選ばせること。

学校では、旺文社主催の大学模擬テスト、校内実力テストを実施している。これらのテストに積極的に参加をすすめて、学力をためさせるようにすること、旺文社の模擬試験等には、殆んど全国の受験生が参加していること、またテストの結果を科学的に処理して受験者各自の志望大学への可否の可能性を明示してあるので、この結果によ